

1 章 名古屋市の歴史的風致の背景

1 市の概要

(1) 自然的環境

①位置

名古屋市は日本の国土のほぼ中央、木曾・揖斐・長良の木曾三川によって形成された濃尾平野の東に位置し、南は伊勢湾に面し、名古屋港を構成している。また、名古屋市の市域は春日井市など 11 市 4 町 1 村と接し、面積は 326.50 km² となっている。

東京から新幹線で 2 時間弱（約 260km）、大阪からは 1 時間弱（約 140km）の地点に位置し、全国的な物流等において有利な条件を備える。



図 1-1 名古屋市の位置

②地形

名古屋市の市域は、東西約 24km、南北約 25km、面積 326.50 km²に及び、標高は、守山区にある東谷山^{とうごくさん}山頂の 198.4m を最高点とし、港区新茶屋四丁目の一 1.73m を最低点とする。市の地形は、東部の丘陵地、中央部の洪積台地、北・西・南部の沖積地の 3 つに大きく分けられる。

市の東部には、瀬戸市・豊田市に位置する標高 629m の猿投山^{さなげ}へと連なる標高 70m 前後の低位丘陵が広がっている。この地域は、良質の粘土を産することから、古墳時代から鎌倉時代の初めにかけて、一大窯業生産地となった。地質は新生代第 3 紀層の安定した地盤で、現在は良好な住宅地として利用されている。

市の中央部には、標高 10～16m 前後の名古屋台地・熱田台地・瑞穂台地・笠寺台地などの洪積台地が南北に伸びる。これらの台地縁辺には、縄文時代以降、集落が形成され、早くから人々の居住地として利用されてきた。台地の間には山崎川や天白川などの川が流れ、各時代の人々の営みに大きな影響を与えてきた。台地の南方一帯は、古代には干潟のような景観で、『万葉集』にも「桜田^{たづ}へ 鶴鳴きわたる 年魚^{あゆ}市^{ちがた}潟 汐干にけらし 鶴鳴き渡る」と歌われている。また、名古屋台地の西北端には、慶長 15 年 (1610)、徳川家康によって名古屋城が築かれた。この地はすぐ北側の沖積低地より約 10m 高く、北及び西方に濃尾平野が一望できる城造りにはうってつけの場所であった。一方、名古屋台地の南側に伸びる熱田台地には、南端に尾張氏の鎮守熱田社（熱田神宮）が鎮座し、古代以来、港町・漁師町・宿場町・門前町という複合した機能を有する町として発展した。

市の北及び西方には、庄内川に面した平坦な沖積地が広がる。水利のよい稲作地帯として、古代以降豊かな農地として利用され、「富田^{とみた} 荘^{のしょう}」「安食^{あじき} 荘^{しょう}」などの荘園も営まれた。南は伊勢湾を臨む海拔 0m 以下の低地帯で、江戸時代以降、新田開発や工業用地として埋め立てられ、明治期に整備された港湾とともに工業都市としての名古屋を支えてきた。

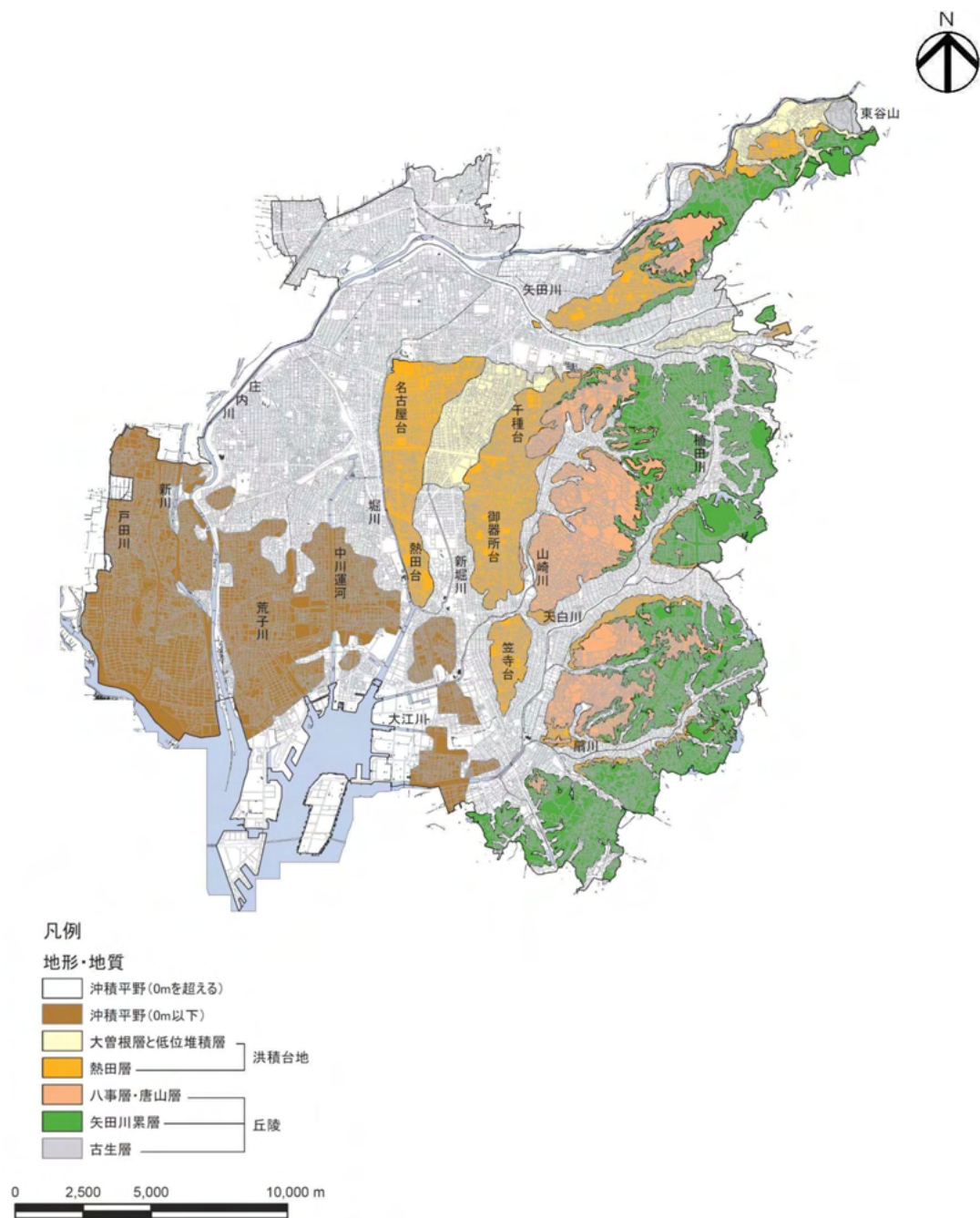


図 1-2 地形図

③気候

名古屋の気候は、温帯気候の温暖湿潤気候に分類される。夏は蒸し暑く、冬は伊吹おろしと呼ばれる冷たい北西の季節風が吹いて明け方の冷え込みが厳しい。年平均気温は 16.2℃。最暖月（8 月）と最寒月（1 月）の平均気温の差は大きく、季節の変化は明瞭である。降水量は、年間 1,578.9mm となっている。

このような気候条件のもと、名古屋市内では、シイやカシからなる常緑広葉樹林帯が守山区の東谷山地域などに散見される。また、熱田神宮の社叢は比較的自然な状態で残されており、熱田神宮境内が古くから神域として守られてきたことを伝えるとともに厳かな雰囲気醸し出し、歴史的風致形成の背景となっている。

【名古屋地方気象台 気象データ（1991～2020 年の平年値）】

気温	年平均 16.2℃、8 月平均 28.2℃、1 月平均 4.8℃
相対湿度	年平均 66%
日照時間	年合計 2,141.0 時間
降水量	年合計 1,578.9mm

出典：気象庁ホームページ

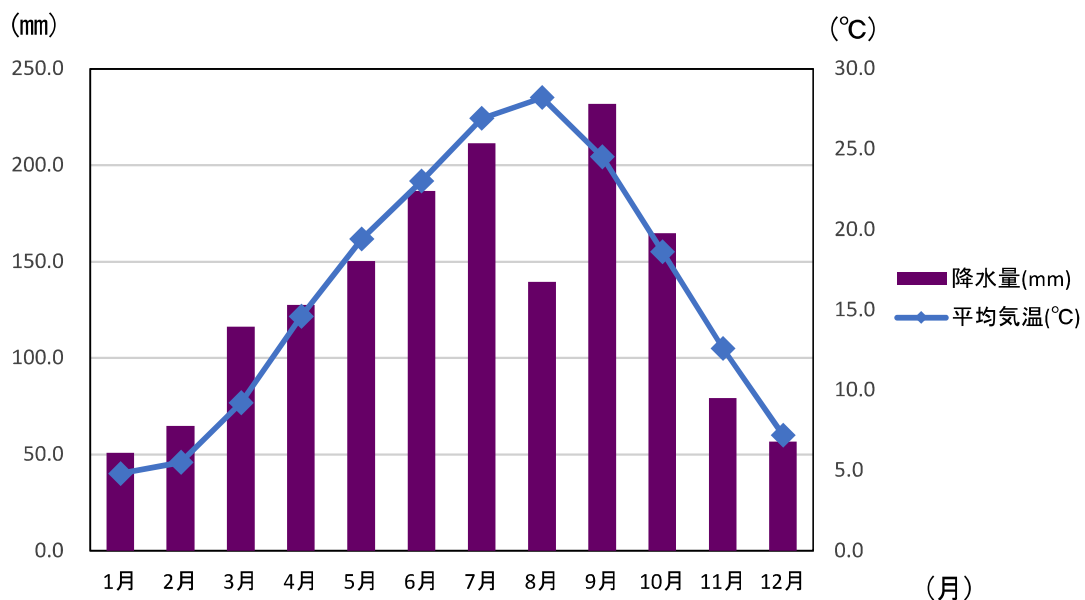


図 1-3 気温・降水量の変化(1991～2020 年の平均値) 出典：気象庁ホームページ

（２）社会的環境

名古屋市は、愛知県の県庁所在地であるとともに、中部圏の政治・経済・文化などにおいて中心的な役割を担う大都市であり、企業の本支店、官公庁、教育機関、病院、商業施設などが集積している。



写真 1-1 市中心部の栄地区



写真 1-2 三の丸の官庁街

①人口と面積

名古屋市の人口は、明治 22 年（1889）の市制施行当時には、約 16 万人であったが、昭和 9 年（1934）には 100 万人を突破し、現在は、約 233 万人で、東京都区部、横浜市、大阪市に続く規模となっている。市域は、当初、旧城下町の範囲を中心とする約 13.3 km²であったが、明治 40 年（1907）に熱田町を合併、大正 10 年（1921）には近隣 16 町村を編入合併、戦後も昭和 30 年代に周辺市町村を編入合併するなど段階的に拡張し、昭和 39 年（1964）に知多郡大高町・有松町を加えてほぼ現市域となった。現在の名古屋市の面積は 326.50 km²である。

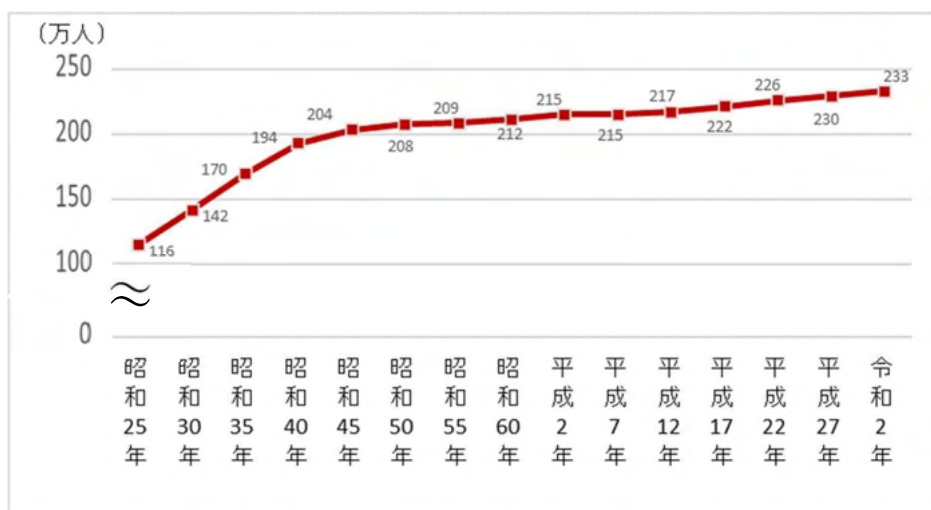


図 1-4 現市域における人口の推移(出典:国勢調査より)

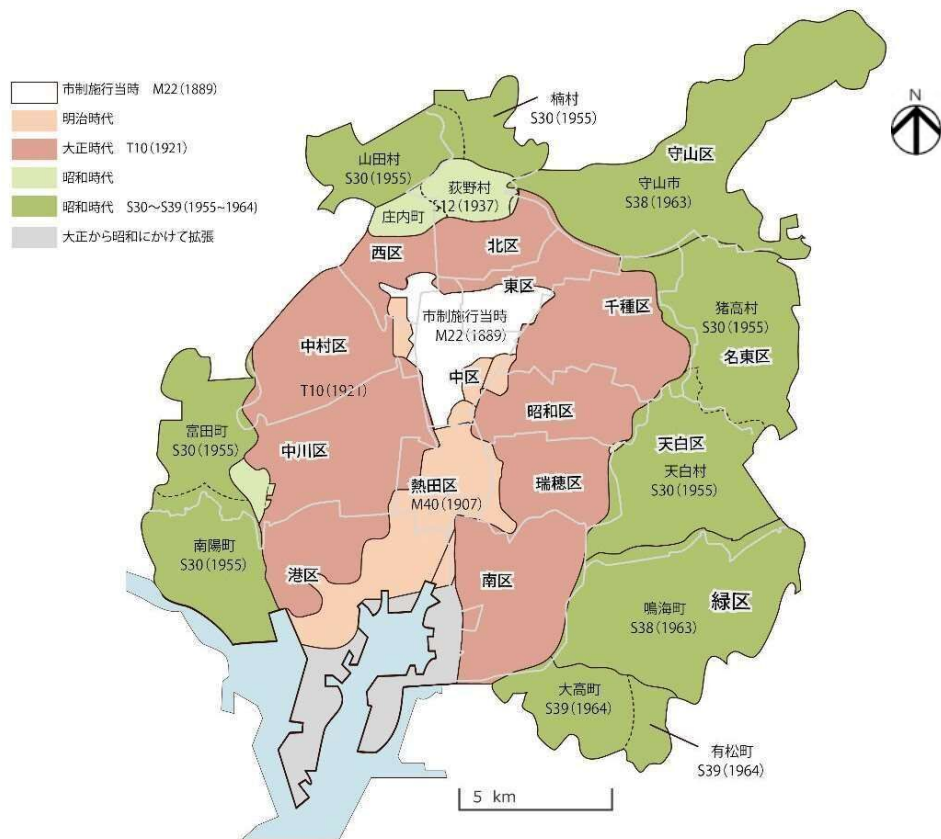


図 1-5 市域変遷図

出典：名古屋市都市計画
マスタープラン 2030 より作成

②土地利用

名古屋市は、市域全域が都市計画区域となっており、現在の本市の市街化区域面積は、約 30,258 ha で市域面積の約 93%を占めている。用途地域の構成としては、商業系が市街化区域全体の約 16%、住居系が約 62%、工業系が約 22%となっている。

都心部（栄地区）は、江戸時代に整備された^{ごぼんわり}碁盤割の城下町の上に、商業施設等が集中し、繁華街を形成している。また、名古屋市では、地下鉄が開業した昭和 30 年代以降、地下街が盛んに建設され、現在、栄地区と名古屋駅地区を中心に約 17 万㎡が形成されている。

住宅地は明治以降、耕地整理や土地区画整理などにより造成され、戦後も土地区画整理や周辺市町村との合併などにともない拡大した。現在、市域の広い範囲が住宅地として利用されている。また、臨海部は、工業・流通系の用地となっている。

樹木、芝・草地、農地、水面の合計面積が市域面積に占める割合（緑被率）は 21.5%（令和 2 年度調査結果）である。

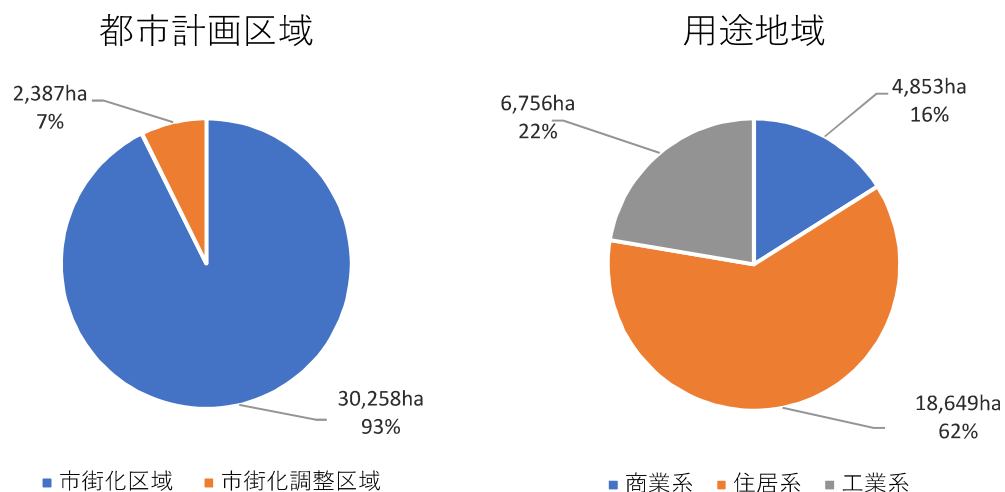


図 1-6 都市計画区域面積(令和 3 年 10 月 1 日) 出典:名古屋市統計年鑑(令和 4 年版)

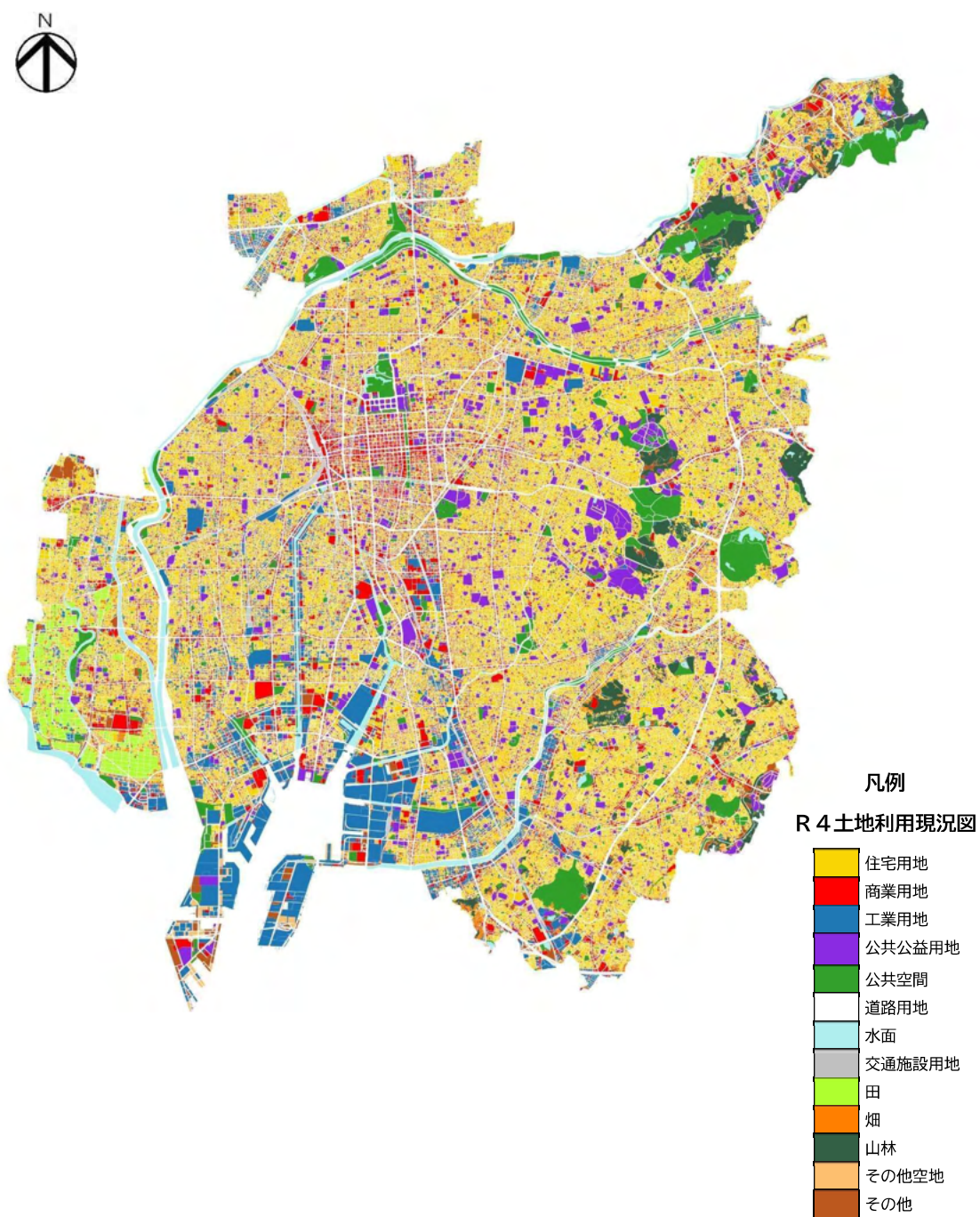


図 1-7 土地利用状況

③人口動態

名古屋市の人口は令和 2 年（2020）の 233 万人をピークに減少し、令和 22 年（2040）には 226 万人と推計されている。年齢構成は少子高齢化が進み、特に 65 歳以上の割合が、令和 22 年（2040）に 30.7%まで上昇する予測である。

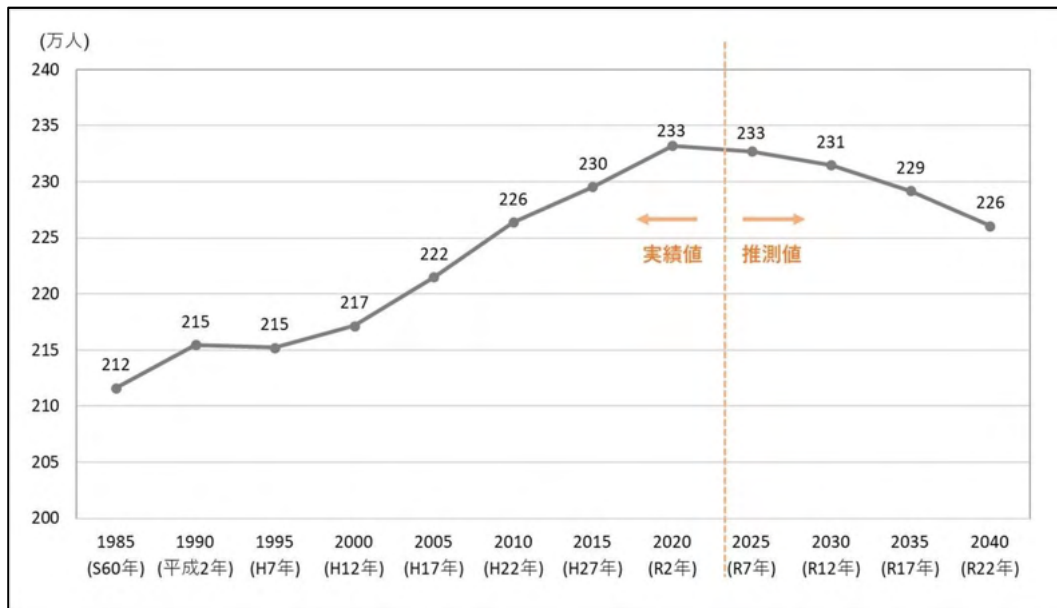


図 1-8 総人口の推移

出典:名古屋市将来人口推計
(H30 年時点)

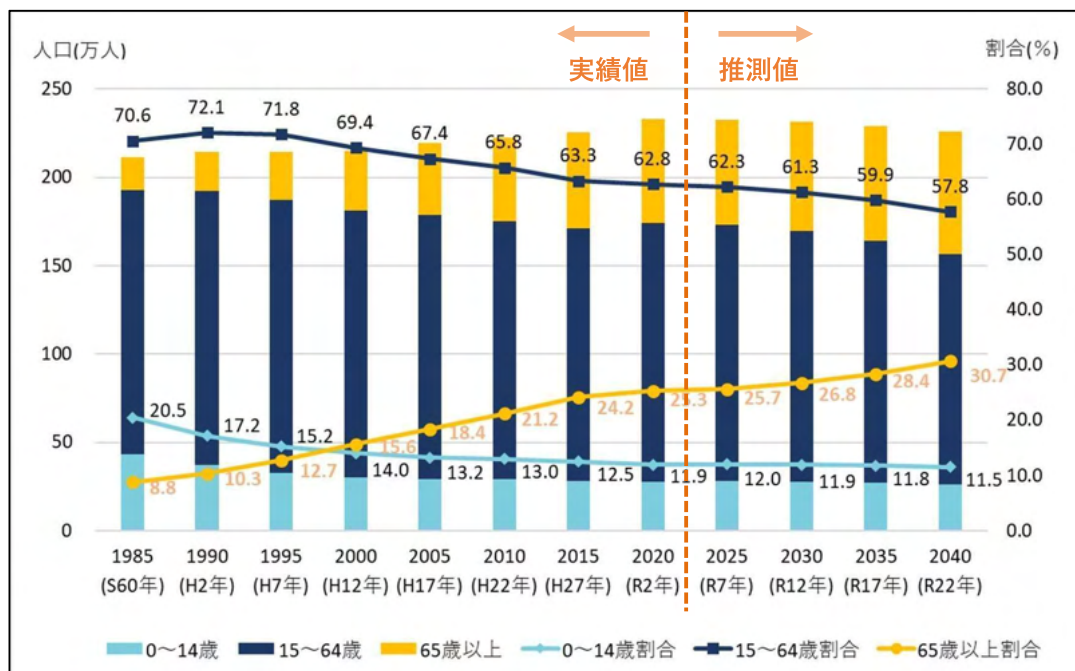


図 1-9 年齢区分別人口構造の推移

出典:名古屋市将来人口推計
(H30 年時点)

④交通網

名古屋市内には、東名高速道路・伊勢湾岸自動車道や国道 1 号など国土の広域ネットワークを形成する道路が通り、都市圏の道路網としては、名古屋高速道路をはじめ、2 つの環状道路や戦災復興計画に由来する広幅員道路などが整備されている。

また、空の玄関としては、中部国際空港、県営名古屋空港が近隣市町に立地しており、航空路線で国内外の各地と結ばれている。

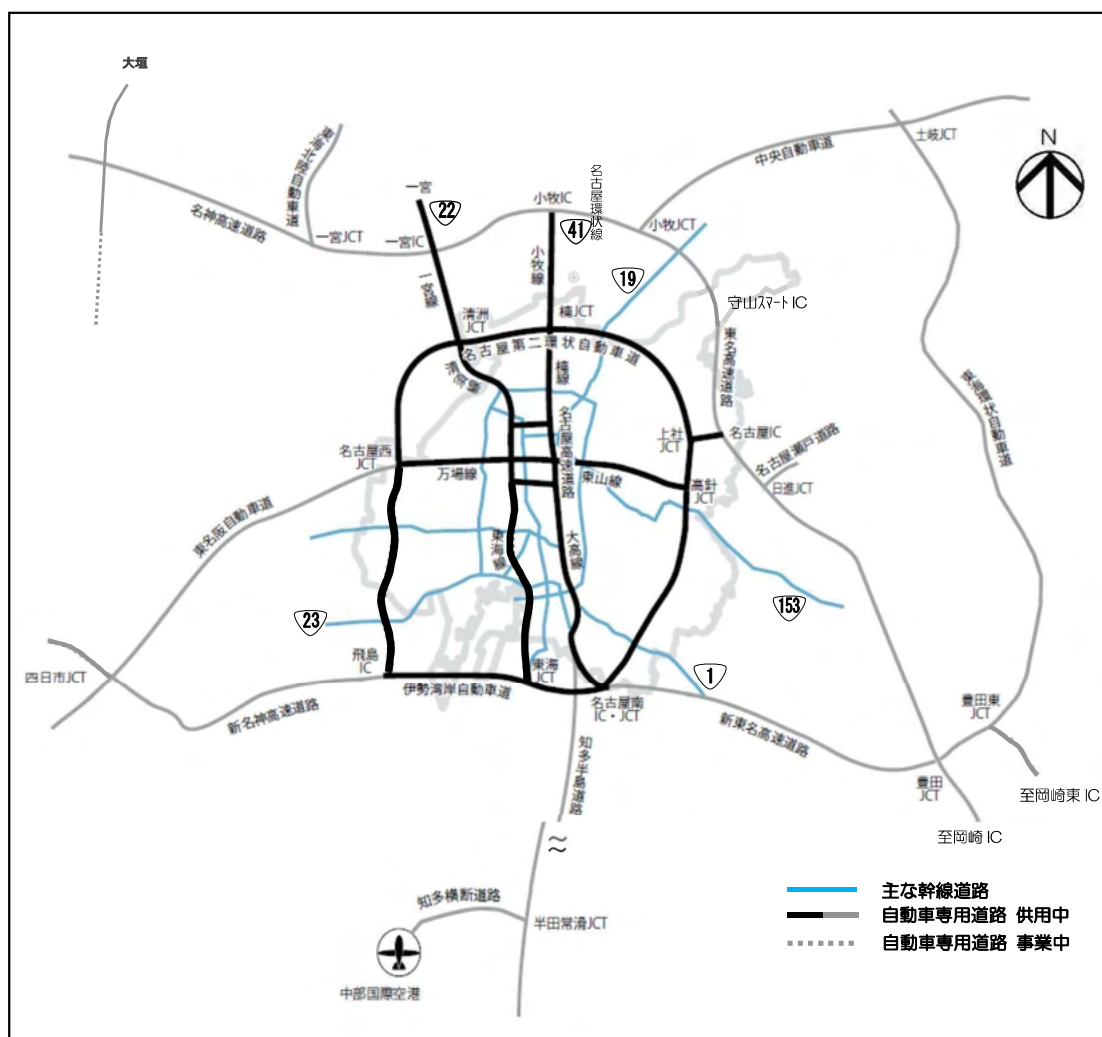


図 1-10 道路ネットワーク

鉄道は J R 東海道新幹線、J R 東海道線、名古屋鉄道、近畿日本鉄道などが乗り入れ、主要な路線が接続する名古屋駅は東海地方における一大ターミナルとなっている。市営地下鉄は、昭和 32 年 (1957) の開業以来、営業キロを伸ばし、現在 93.3 km を運行している。なお、地下鉄名城線は、平成 16 年 (2004) に日

本で最初の環状運転を開始した地下鉄路線であり、名古屋城と熱田神宮を結ぶ路線でもある。地下鉄とネットワークを組む市バスは、769 kmで営業し、公営バスでは長崎県営バスに次いで2番目となる（令和4年3月末時点）。市バス路線の一部分である基幹バスは、全国で初めて中央走行方式が採用され、バス運行の定時性が確保されている。また、専用高架と一般道からなるガイドウェイバス「ゆとりーとライン」は守山区志段味方面の利便性を高めている。名古屋臨海高速鉄道「あおなみ線」は、名古屋駅と名古屋港の金城ふ頭駅とを結んでいる。

令和9年（2027）以降には、品川-名古屋間におけるリニア中央新幹線の開業が予定されている。



写真 1-3 中央走行方式



写真 1-4 ガイドウェイバス

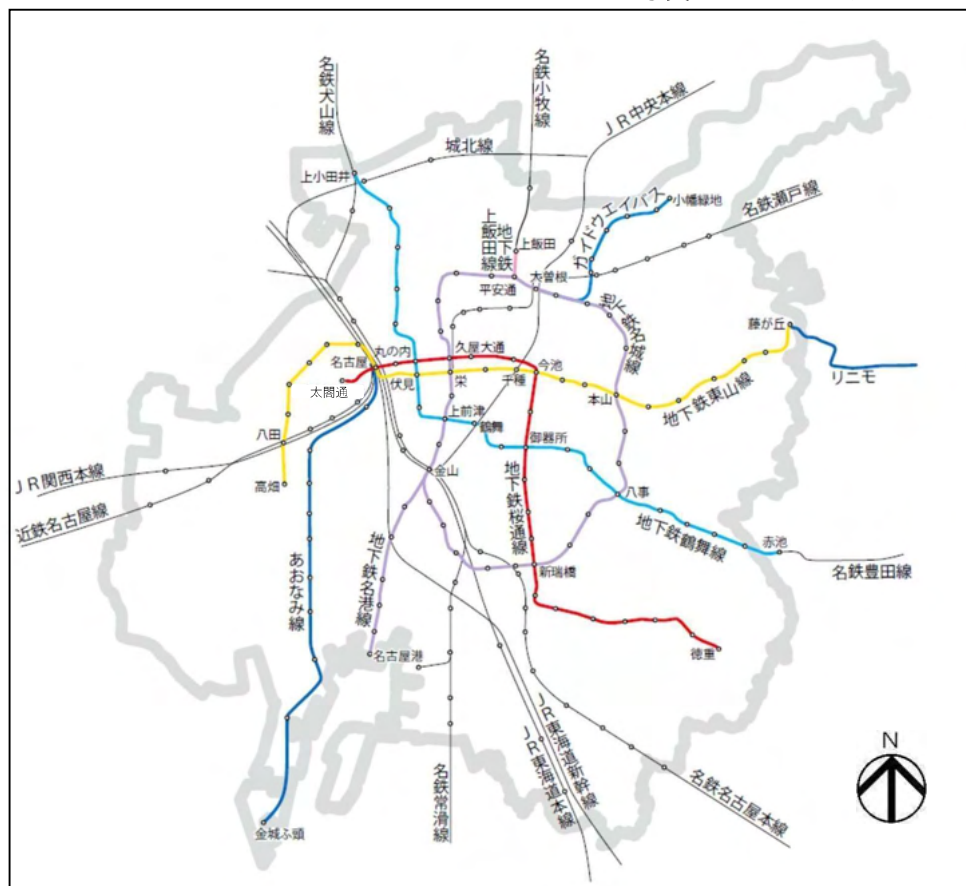


図 1-11 鉄道ネットワーク

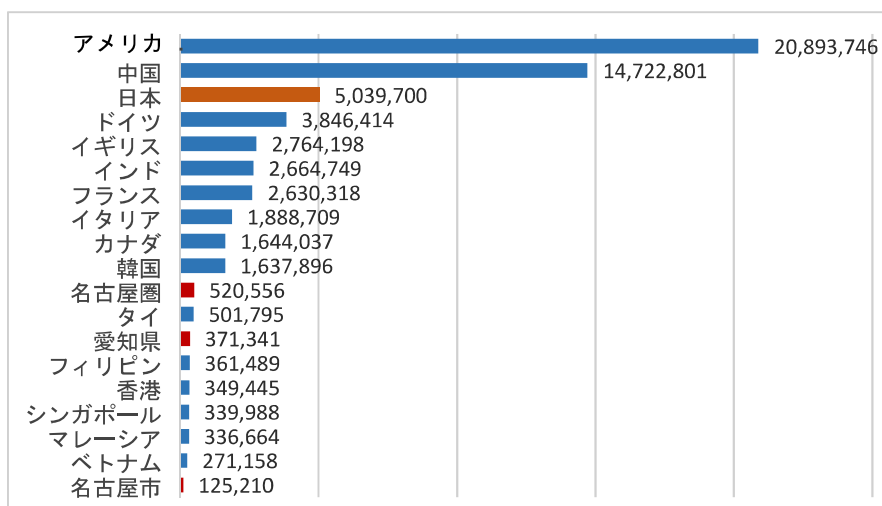
⑤産業

市を中心とした名古屋圏は、古くから繊維、陶磁器、自動車、工作機械など「ものづくり産業」が集積し、東京、大阪圏とともに、日本の3大経済圏の一つを形成してきた。名古屋市は、一国の経済規模にも匹敵する世界的なものづくりの中核圏域である、名古屋圏（愛知県・岐阜県・三重県）の中心都市として発展してきた。名古屋圏（愛知県・岐阜県・三重県）の経済規模は、都道府県別県内総生産でみると国内の約1割を占める規模である。

名古屋圏の主要経済指標のうち、対全国比10%を超える指標として、第2次産業総生産は全国比15.2%があげられ、名古屋圏が製造業中心の産業構造であることがわかる。しかし、名古屋圏の特徴である第2次産業に関する指標は、本市においては大きなウェイトを占めておらず、本市は、製造業が牽引する名古屋圏の中心都市として、商業及びサービス部門を担っている。

産業構造について、製造業の集積が名古屋圏では37.3%と他の都市圏に比べ高くなっているものの、本市では9.6%と小さく、反面、卸売・小売業のシェアが21.9%と高くなっている。また、海の玄関口となる名古屋港は貿易額が東京港に次いで第2位を誇っている。

名古屋市は平成元年の「デザイン都市宣言」以降、世界デザイン博覧会の開催や国際デザインセンターの設立など、行政と民間が一体となってデザインをキーワードとした産業の振興やまちづくりに取り組んできた。平成20年には国際連合教育科学文化機関(ユネスコ)の制度である「クリエイティブ・シティズ・ネットワーク(デザイン分野)」に加盟認定され、豊かな造像性あふれる魅力的な都市づくりを推進している。



資料：総務省「世界の統計2023」、内閣府「県民経済計算」

(注) 1.名古屋圏は愛知県、岐阜県、三重県の3県 2.為替レートは2020年相場平均 1US\$=106.8円

図 1-12 主要国 GDP(名目)比較 2020 年

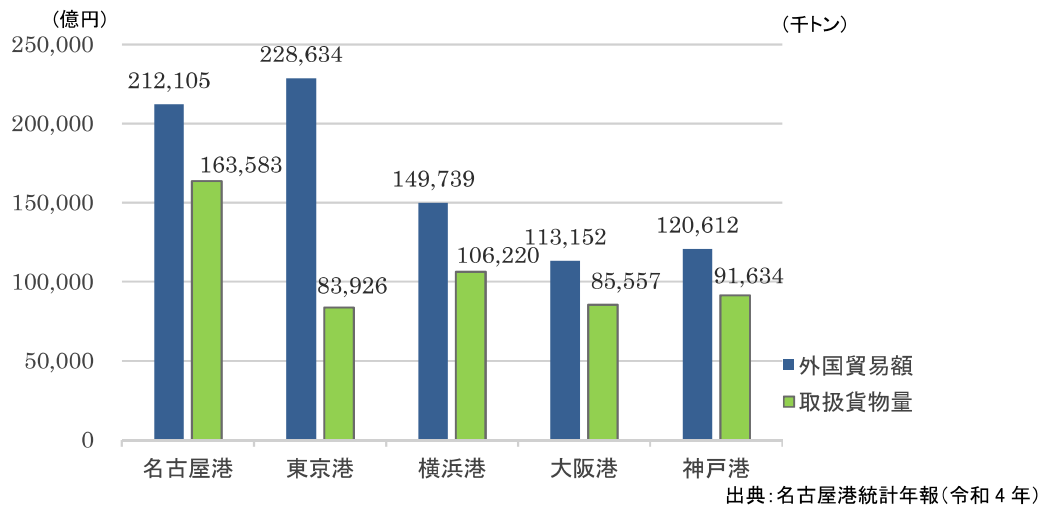


図 1-13 五大港の外国貿易額と取扱貨物量

本市の令和2年(2020)の産業別就業者数は、「令和2年国勢調査 就業状態等基本集計結果」によると就業者1,053,983人のうち、農業・林業の第一次産業は2,762人(0.3%)、製造業を中心とする第二次産業は234,552人(22.3%)、卸売業・小売業やサービス業等の第三次産業は784,506人(74.4%)となっている。第三次産業の比率が高く、平成27年(2015)調査に比べると、さらに比率が上がっている。

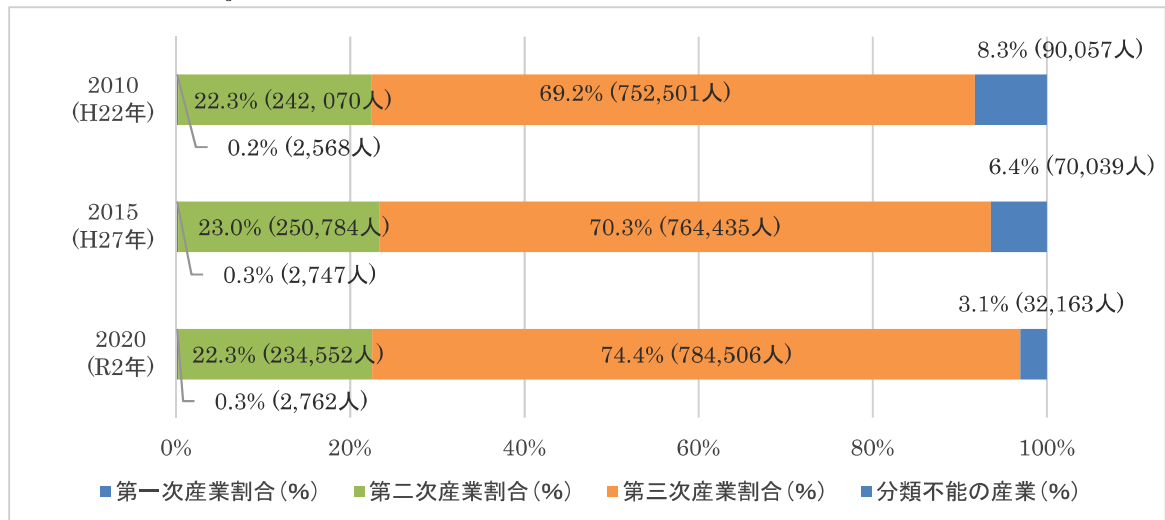


図 1-14 産業別就業者数割合

⑥観光

本市を訪れる観光客数は、令和元年（2019）にかけて緩やかな増加傾向にあり、令和元年（2019）の観光入込客数は、4,999 万人となっているほか、宿泊客数については 712 万人となり、特に、外国人宿泊者数は 135 万人と大きく増加していた。令和 2 年（2020）には新型コロナウイルス感染症の影響により、観光入込客数は 2,211 万人と大きく減少したが、令和 4 年（2022）は 3,719 万人まで回復している。

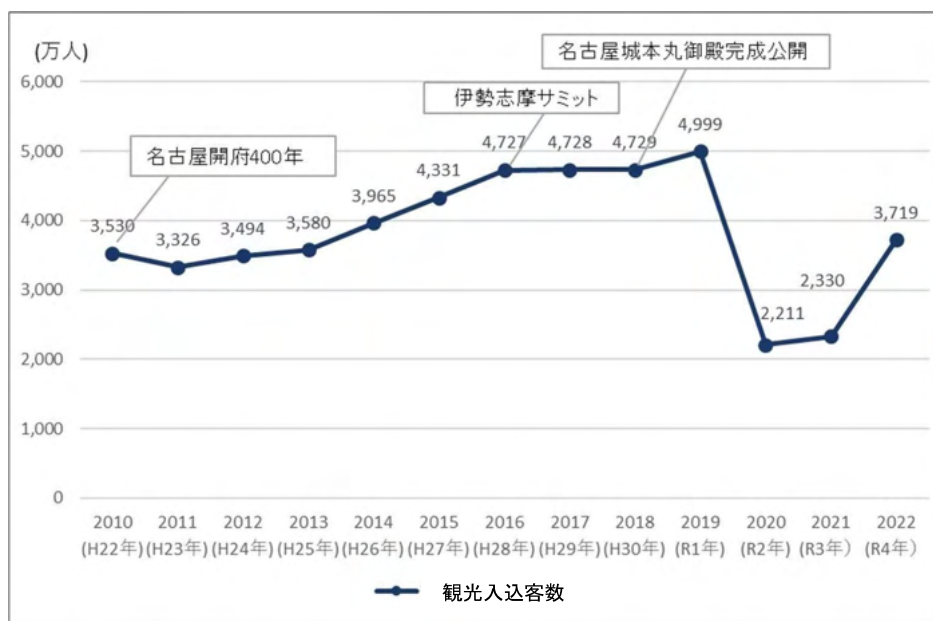


図 1-15 観光入込客数

出典:名古屋市観光客・宿泊客動向調査



図 1-16 宿泊客数

出典:名古屋市観光客・宿泊客動向調査

主要観光施設別入込客数を見ると、コロナ禍前の令和元年（2019）では、熱田神宮は約 741 万人、名古屋城は約 221 万人となっている。令和 2 年（2020）、令和 3 年はコロナ禍により多くの施設で減少したが、令和 4 年（2022）は回復傾向にあり、熱田神宮は約 472 万人、名古屋城は約 126 万人となっている。

（単位：人）

	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
名古屋城	2,175,483	2,205,544	648,089	677,989	1,262,701
東山動植物園	2,521,652	2,514,391	1,343,593	1,756,409	2,251,396
東山スカイタワー	272,771	273,380	108,175	153,627	241,391
中部電力 MIRAI TOWER	316,524	10,307	58,745	87,818	133,570
熱田神宮	7,106,742	7,405,049	5,642,933	3,100,507	4,720,911
名古屋港*1	461,433	465,043	177,173	230,248	374,226
名古屋市科学館	1,362,519	1,335,840	478,336	635,764	1,006,206
徳川美術館	217,797	232,429	71,069	101,242	132,653
名古屋市博物館*2	451,453	523,006	164,308	232,316	276,697
東谷山フルーツパーク	418,892	503,145	376,754	444,703	485,270
農業文化園・戸田川緑地	1,074,356	1,062,155	792,907	919,030	992,835
でんきの科学館	308,754	339,828	53,700	63,873	139,394
名古屋市美術館	682,826	349,676	1,273	134,902	382,766
名古屋港水族館	2,089,865	2,195,713	937,529	1,255,084	1,844,811
トヨタ産業技術記念館	425,972	459,353	95,604	107,172	200,307
白鳥庭園	145,698	165,877	98,156	115,706	113,470
市政資料館	100,402	108,023	45,844	61,040	83,590
名古屋能楽堂	184,198	157,513	57,475	66,048	104,802
愛知県美術館	30,016	683,200	328,086	452,327	428,372
名古屋市農業センター	570,633	554,046	375,073	337,821	333,930
有松・鳴海絞会館	164,747	164,787	107,173	62,776	91,511
久屋大通庭園フラリエ	554,956	579,101	366,363	433,458	498,064
名古屋ボストン美術館 注1	194,100	-	-	-	-
ノリタケの森	333,713	327,871	113,992	85,764	227,691
ブルーボネット 注2	47,903	45,129	25,017	46,945	60,486
徳川園	328,011	352,563	168,615	182,694	259,364
文化のみち二葉館	31,253	33,750	11,171	14,876	21,736
スカイブロムナード	83,065	94,904	46,944	60,606	114,643
リニア・鉄道館	409,056	440,982	145,975	179,892	266,553
パロマ瑞穂スポーツパーク	1,332,061	1,474,347	554,655	665,556	846,487
バンテリンドーム ナゴヤ	4,382,529	5,179,563	1,093,807	926,784	3,032,421
主要観光施設の入込客数合計	28,779,380	30,236,515	14,488,534	13,592,977	20,928,254

*1 名古屋港：ポートビル展望室、名古屋海洋博物館、南極観測船ふじの入場者の合計

出典：名古屋市観光客・宿泊客動向調査

*2 名古屋市博物館：常設展示室、部門展示室、特別展示室、講堂入場者延人数

注1：名古屋ボストン美術館は2018年に閉館

注2：ブルーボネットは12月26日から翌2月末日まで冬季休園。

図 1-17 主要観光施設別入込客数の推移

(3) 歴史的環境

①縄文・弥生時代

名古屋の地に人々が住み始めたのは、今からおよそ 3 万年前の旧石器時代である。その後、およそ 1 万 6 千年から 1 万 5 千年前に始まった縄文時代には、土器と弓矢を持った人々が次第に定住を始める。この頃は、台地や丘陵の奥部まで海が浸入し、現市域の西側は大部分が海であった。当時の海岸線は緑区上ノ山、鉾ノ木、南区粕畑、瑞穂区大曲輪などにある貝塚の存在から推定できる。縄文時代が終わりを告げる 3,000 年ほど前には守山区牛牧、緑区 雷・矢切などに大規模な集落が誕生したが、やがて西日本から東進してきた新たな文化と入れ替わることになる。

名古屋における最初の弥生時代の集落は、西区貝田町と北区西志賀町の接するあたりに営まれた。この集落遺跡からは、弥生文化の特徴であり西日本からの稲作文化の伝播を示す遠賀川式土器などが出土している。

やがて弥生人は熱田台地の南、熱田区高蔵周辺、瑞穂台地の瑞穂区牧町一帯などに居住空間を広げ、大小の集落を形成するが、近畿地方に勢力を張った大和王権に次第に組み込まれていった。

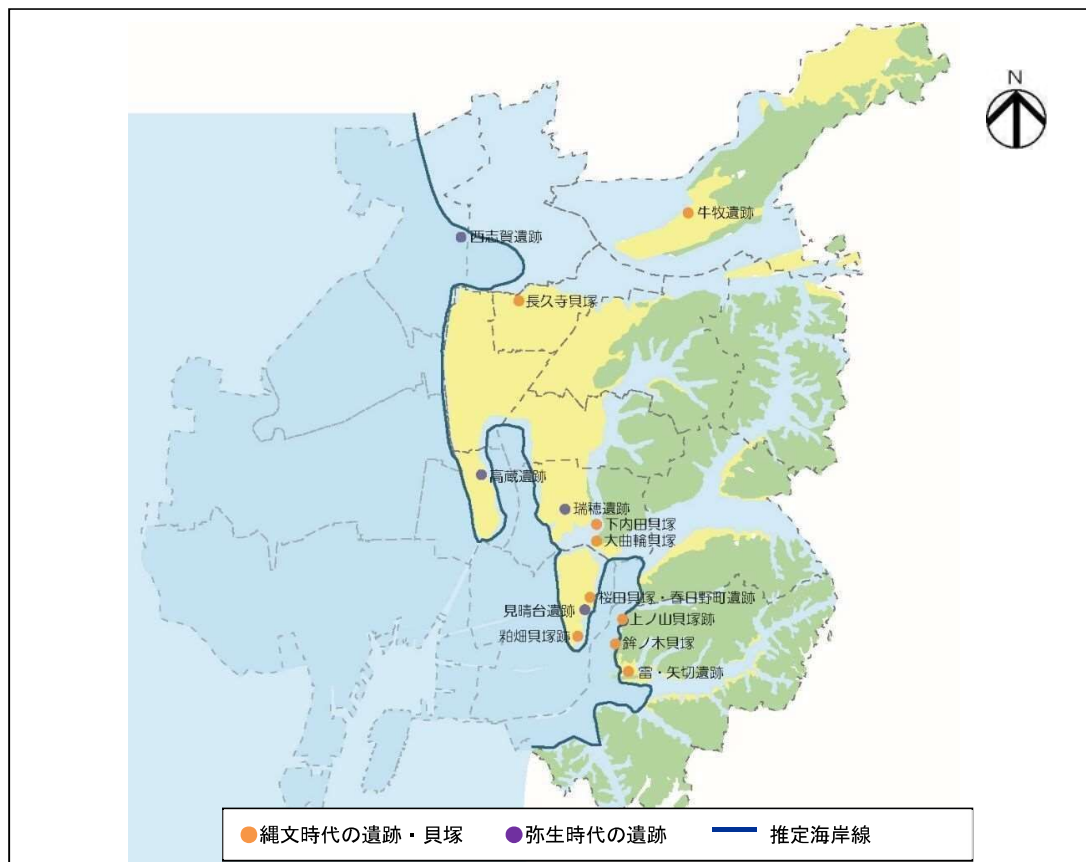


図 1-18 縄文・弥生時代の主な遺跡

②古墳時代

古墳時代になると、それまで名古屋近辺に散在していたさまざまな勢力は、畿内王権に近づいていった。そうした勢力の中から尾張の支配権を握る「尾張氏」^{おわりうじ}が誕生し、5世紀の末頃までには尾張一円の統一をほぼ終え、畿内王権の支配下に組み込まれた。さらに尾張氏は、一族の女性を天皇に嫁がせ天皇家の外戚として王権内での地位をゆるぎないものにしていった。

現市域には、守山区の志段味地区や台地部に古代勢力が築いた古墳が残されている。

守山区志段味には、4世紀前半、尾張で最古の部類に属する大型の前方後円墳である白鳥塚古墳（史跡）が築造され、その後、古墳時代の全時期を通じて断続的に古墳が築かれた。志段味の古墳からは、当時の最新式の武具などが出土しており、大和大権との関係の深さがうかがわれる。志段味に古墳を築いた勢力が、やがて台地部へと進出し、濃尾の王として君臨した尾張氏へと発展していった。熱田台地の西縁部に築かれた断夫山古墳（全長 150m）は、尾張氏による尾張統一の記念碑的な首長墓であると考えられている。

また、5世紀中頃になると、当時先進的な焼きものであった須恵器^{すえき}の生産が始まった。名古屋市内の東部丘陵一帯から猿投山^{さなげやま}（豊田市）にかけての地域は、焼きものの原料に適した地層が広範に分布する地域であり、古代から中世にかけて灰釉陶器^{かいゆうとうき}、緑釉陶器^{りよくゆうとうき}、山茶碗などの一大生産地として栄えた（猿投山西南麓古窯跡群^{さなげやませいなんろくこようせきぐん}）。その系譜は今日の瀬戸・美濃・常滑など日本を代表する窯業生産地へと引き継がれている。



写真 1-5 断夫山古墳(史跡)



名古屋市博物館蔵

写真 1-6 池下古墳の須恵器

③古代～中世

大化元年（645）、隋・唐の律令制にならった中央集権国家が成立し、公地公民による体系的な土地支配体制が確立する。尾張国には、中島、海部、葉栗、丹羽、春部、山田、愛智、智多の8郡が置かれた。尾張国の政治の中枢である国衙は中島郡の稲沢（現 稲沢市）に設置された。

古墳時代にこの地を統一した尾張氏などの在地豪族は、7世紀中ごろからは古墳に代わって寺院を建立するようになり、熱田台地上には、尾張氏の氏寺とされる尾張元興寺が建立された。また、8世紀には稲沢の尾張国分寺建立と呼応するように、小幡廃寺（現 守山区）、古観音廃寺（現 昭和区）、鳴海廃寺（現 緑区）などの古代寺院が建立されていったことが考古資料から明らかになっている。

古代から現在まで続く神社の記録としては、平安時代の延喜年間（901～923）にまとめられた『延喜式』（927）の「神名帳」に、熱田神宮（熱田区）、氷上姉子神社（緑区）、尾張戸神社（守山区）などにあたる神社名が見られる。熱田神宮に関する記録はこの他にもさまざまな文献が残り、古代から重要な存在であったことがうかがえる。

10世紀末から11世紀前半になると、市域周辺部を大きくとり囲むように流れる庄内川流域や、河口近くの扇状地などに荘園が形成されていった。富田荘（現 中川区富田町など）や安食荘（現 北区など）は、残された絵図や史料により位置や地割などを知ることができ、当時の土地利用の状況を今に伝える貴重な存在である。

荘園が次々と成立するなか、「那古屋（名古屋）」という地名も登場してくる。平安時代末期に成立した那古屋荘は、後白河上皇の女御で高倉天皇の生母である建春門院に寄進された皇室領荘園で、現在の市中心部の位置する名古屋台地北部を中心とする荘園と推定されている。この荘園の名である「那古屋」は、中世以降の文献によると、「那古屋」・「名護屋」・「名古屋」とも表記されており、この地が古くから「なごや」と呼ばれていたことが分かる。

【コラム】熱田大宮司家と源頼朝

熱田神宮を管理する大宮司^{だいぐうじ}の職は、古代以来尾張氏が世襲してきたが、平安時代末期に、大宮司尾張員職^{かずもと}の娘が尾張国司として赴任してきた藤原季兼^{すえかね}（1101年没）と結婚し、その子である藤原季範^{すえのり}が大宮司職を継いだ。これ以後、その子孫が大宮司の職を世襲することになり、ここに尾張氏から藤原氏への大宮司職の交替が行われたのであった。藤原季範は、京都で院政を行っていた鳥羽上皇に仕え、同じく鳥羽上皇の側近であった源義朝に娘を嫁がせた。この季範の娘の産んだ子の一人が後の源頼朝であり、現在の誓願寺（熱田区）付近が頼朝の出生地として伝えられている。



写真 1-7 誓願寺

なお、藤原流大宮司家は、南北朝期頃にはいくつかの家に分かれ、そのひとつである千秋家^{せんしゅうけ}は、室町時代以降、徐々に大宮司職を独占していった。

鎌倉に幕府が開かれると、京・鎌倉間を結んだ鎌倉街道を商人・旅行者などの人々が往来するようになった。現市域とその周辺の様子は『十六夜日記』^{いざよいにつき}（阿仏^{あぶつ}尼）や『海道記』などの紀行文にも描かれている。鎌倉街道の宿は、鳴海、熱田、萱津^{かやづ}（現 あま市付近）にあったとされるが、『東関紀行』には、「かやつの東宿」の記載があり、これは現在の中村区宿跡町・東宿町付近を指すというのが江戸時代以来の通説となっている（東宿町の名称は近代に付けられた）。また、『一遍聖絵』には、弘安6年（1283）に一遍らの一行が甚目寺^{じもくじ}（現 あま市）を訪れた様子とともに、門前に集まる人々の様子が描かれている。こうした街道沿いの人々の交流もこの地域の生活・文化に影響を与えていった。

古代において灰釉陶器を全国に供給していた尾張の猿投窯では、11世紀末から12世紀初頭にかけて山茶碗と呼ばれる粗雑な日常雑器の量産に変わり、鳴海・有松地区に多数の窯が築かれていった。一方、陶器の生産の中心地は瀬戸と常滑（いずれも日本六古窯に含まれる）に移った。その後、13世紀後半に東濃地方で山茶碗の生産が盛んになると、猿投窯で量産されてきた山茶碗は生産が縮小され、終焉に向かっていった。

室町時代、尾張では足利一門の有力氏族である斯波氏しばが守護となり、斯波氏の尾張支配を補佐する守護代として、織田氏が越前国から尾張国に移ってきた。

また、この頃には、足利氏の流れを汲む今川那古野氏なごやが名古屋台地北部の那古野の地を領有していた。今川那古野氏は、この地に那古野城を築いたとされる。

応仁の乱の後、尾張は織田氏一族が割拠する状態となったが、その中で、織田信長の祖父にあたる信貞のぶさだ（信定）は、勝幡しょうはた（現 愛西市）に城を築き、当時港町として栄えた津島をおさえて力を蓄えた。天文 7 年（1538）頃、信長の父・信秀は、今川那古野氏の那古野城を攻略し、本拠地を那古野の地に移した。しかしながら、信秀・信長とも、那古野城に長くとどまることはなかった。名古屋台地に城下町が築かれたのは、豊臣秀吉による天下統一事業とその後の関ヶ原の戦いを経た慶長 15 年（1610）のことであった。

一方、中世における熱田は、この地の土豪加藤家と熱田社の社家しゃけ（大宮司）である千秋家せんしゅうが実質的に支配していた。中世末には、門前の賑わいとその経済力に目を付けた織田信秀・信長の掌中に収められ、その庇護を受けることとなる。加藤家は、商業・金融業・運輸業を営んだ旧家で、本家筋を東加藤ずしよのすけ（図書助）、分家筋を西加藤はやとのすけ（隼人佐）といった。加藤家は、織田信秀の命を受け幼少の徳川家康（竹千代）を預かっていたことでも知られている。

熱田浜に魚市場ができ、独占的な問屋が登場するのもこのころのこととされている。古来、尾張氏の氏神を祀る熱田社の門前町として発展してきた熱田は、中世以降、伊勢湾最奥部の漁師町・港町として栄えていったのである。



図 1-19 城・砦、古戦場等の位置とゆかりの人物

弘治2年（1556）、信長は清須城に入り、尾張国内を統一する一方、今川家の圧力に対抗するため、大高城・鳴海城（いずれも緑区）を取り囲むように複数の砦を築いた。

永禄3年（1560）、今川義元は駿府を^{すんぶ}発ち、尾張に侵攻した。信長は清須より出陣し、兵を進めた義元を桶狭間で討ち取った。劣勢をはねのけた桶狭間での勝利により、信長の名は全国にとどろき、その後、岐阜、北陸、近畿へと進出して天下統一の足掛かりを築いていった。なお、桶狭間の戦い当時、松平元康（のちの徳川家康）は今川方として従軍しており、決戦を前にして大高城へ兵糧を運び入れて、名声を高めたと伝えられている。

天正10年（1582）、天下統一に邁進していた信長は、明智光秀の謀反により本能寺にたおれた。主君の弔合戦と称して備中高松城の戦場から軍を返した羽柴秀吉は、山崎の戦いで明智光秀を討ち、にわかに中央に躍り出た。

秀吉は、天正12年（1584）、小牧・長久手の戦いで徳川家康・織田信雄連合軍と講和を結び、信長の後継者としての地位を不動のものにした。小牧・長久手の戦いは、犬山城、小牧城などを拠点に尾張各所で小競り合いが行われ、現市域では、一時、龍泉寺城の秀吉軍と、小幡城の家康軍が対峙した（いずれも守山区）。龍泉寺はこのとき、秀吉軍によって焼き払われている（慶長年間に再興）。

その後、秀吉は、四国・九州を平定し、小田原攻めの後、家康を関東に封じて

天下統一を成し遂げた。

慶長 3 年（1598）、秀吉が伏見城にて没すると、天下の勢力図は豊臣と徳川に二分された。慶長 5 年（1600）、関ヶ原において、天下分け目の決戦が行われ、これに勝利した徳川により江戸時代の幕が開くことになる。これにより、名古屋は開府前夜を迎えた。

【コラム】多くの武将を輩出した地

天下統一を進めた織田信長、豊臣秀吉が、尾張の出身であることはよく知られているが、尾張はこれらの人物に従って栄達を遂げた多くの武将を輩出した地でもある。

信長の重臣には、平手政秀、林通勝、柴田勝家、佐久間信盛、丹羽長秀などがいた。いずれも信長の出世に大きく関わった武将たちである。これらの武将のゆかりの地として伝わるのは、平手政秀の屋敷があったとされる志賀（北区）、柴田勝家の出身地とされる下社（^{しもやしろ}名東区）などである。また、信長の馬廻りから出世した武将に、荒子（中川区）城主前田利昌の四男であった前田利家や、比良（西区）城主の末子とされる佐々成政などがある。

秀吉の家臣としては、秀吉と同じく中村（中村区）出身の加藤清正や二ッ寺（あま市）出身の福島正則がある。どちらも、年少の頃から小姓として秀吉に仕え、秀吉による天下統一によって大名にまで出世していく。いずれも、関ヶ原の戦いでは東軍につき、のちに名古屋城と城下の建設に大きく関わった。

④近世

関ヶ原の戦い後、家康は四男の松平忠吉に尾張一国を与え、忠吉は清須城に入った。しかし、慶長 12 年（1607）、忠吉は 28 歳の若さで死去した。その後家康は、九男の義直に忠吉の遺領をつがせることとし、同年、義直は弱冠 7 歳で尾張藩のあるじとなった。

慶長 14 年（1609）1 月、家康は、名古屋城の築城と清須からの遷府を正式に決定し、翌年から名古屋城の築城が始まった。

それまで尾張の中心であった清須から名古屋への遷府が行われた理由には、関ヶ原の戦い後も大坂城にある豊臣秀頼と豊臣恩顧の西国大名たちとの戦いに備えるためということが挙げられる。また、名古屋の地は伊勢湾からほどよい距離にあることから、戦略上の利点とともに、城下町の都市的発展を意図したとも考えられている。

名古屋城築城にあたり、家康は、豊臣恩顧の大名たちに助役を命じた。これにより彼らの経済力を弱めて謀反の意図をくじくことを狙ったといわれる。これがいわゆる「天下普請」であり、家康は有力な外様大名の力をそぎつつ、自らの権力を支える城郭を築いていった。

名古屋城の普請は、慶長 15 年（1610）閏 2 月から始められた。石垣の築き上げは極めて迅速に行われ、同年 8 月 27 日には、加藤清正が独力で請け負った大小の天守台が完成した。また、9 月中には、内郭（本丸、二之丸、西之丸、御深井丸）の大部分の普請が完成したという。

内郭の普請が完成すると、続いて天守、櫓、門などの作事が行われた。慶長 17 年（1612）には天守の棟上が行われ、その年の暮れには大天守が完成して金鯢が棟に上がった。続いて慶長 17 年（1612）に入ると本丸御殿の造営が始まり、狩野派の狩野貞信らが名古屋に派遣されて障壁画が描かれた。

城下町の建設は、前時代に尾張の中心であった清須城下からの「清須越」によって行われた。これは、町人や職人などの住民はもちろん、寺社や町名をも含めた都市ぐるみの移転であった。

名古屋城下町は名古屋城を北端とし、名古屋台地上に逆三角形を描くように建設された。三之丸の南側に「碁盤割」と呼ばれる町人地を置き、それを取り囲むように武家地を、さらにその東側と南側に寺町が配置された。碁盤割には、清須越の商家や職人、新住人を住まわせた。また、福島正則を普請奉行に堀川の開削が行われ、これにより、名古屋城と熱田の港が結ばれ、水運による物流が可能になった。

名古屋城の築城と清須越に始まる城下町の建設により、現在まで続く名古屋のまちは初めてその姿を現した。以後、名古屋のまちは賑わいを続け、都市の拡大と文化の蓄積がなされていくのである。



図 1-20 正保四年名古屋城絵図(名古屋城部分)

徳川美術館所蔵 ©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

元和 2 年（1616）、徳川家康が死去すると、義直はそれまで生活していた駿府から名古屋に移り、このときより名古屋城は尾張藩主義直の居城としての歩みを始めた。義直は、はじめ本丸に入ったが、元和 6 年（1620）には、本丸から二之丸御殿に移り、以後、二之丸御殿が尾張藩における政治の中心となって「御城」と呼ばれた。

義直が治めた尾張藩は、尾張に加え、美濃、信濃、三河、近江、摂津のそれぞれ一部を領地とする約 62 万石の大藩であった。尾張藩は、広大な濃尾平野や良材に恵まれた木曽の山などを抱えていたことから、実際には石高以上の実収高があったとされる。また、家康の九男であった義直は、同じく家康の 10 男で紀伊藩主となった頼宣よりのぶ、同 11 男で水戸藩主となった頼房よりふさに対して長兄であったため、尾張藩は御



図 1-21 徳川義直画像(模本)

桜井清香筆 徳川美術館所蔵

©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

三家筆頭と目され、将軍に事故があるときに次の将軍を輩出すべき家柄であった。

義直は、家康の好学の気風を受けて学を尊んだ。林羅山^{はやしらざん}などの儒学者を招いて講義をさせるのみならず、江戸や名古屋城内に儒者の像を安置する聖堂を建てた。また、自ら歴史書『類聚日本記』^{るいしゅう}（江戸前期）や神社の由来や祭神の考察を記した『神祇宝典』^{じんぎほうてん}（江戸前期）を著している。義直は、家康の形見分けである「駿河御譲り本」を収蔵する「御文庫」を城内に建てており、これは今日の蓬左文庫^{ほうさ}のもととなっている。

義直は、立藩もない尾張藩政の基礎をかため、農業用のため池や新田の開発に尽力した。さらに瀬戸の窯業の保護・奨励に力をそそぐなど幅広い政策を推進した。

義直の跡を継いだ2代藩主光友^{みつとも}は、万治3年（1660）に発生した「万治の大火」を機に堀切筋を拡張した。これが今日まで残る広小路の始まりである。光友はさらに、若宮八幡社の整備や橘町^{たちばなちょう}の開発など城下町南部の都市計画を積極的に進めた。光友は、芝居の興業権を橘町にも認め、南の寺町界限は、城下の盛り場・歓楽街として発展していった。

こうした城下の賑わいに拍車をかけたのが、享保15年（1730）に7代藩主となった宗春^{むねはる}である。当時、8代将軍吉宗は、緊縮政策（享保の改革）を進めていたが、宗春はこれと真っ向から対立し、芝居小屋の増設、遊郭の新設、藩士の芝居見物を許可した。宗春は自らも、猩々^{しょうじょう}緋の装束をして白牛に乗り、唐人笠を被り、5尺もあるキセルを携えて町に繰り出したという。

宗春時代の名古屋の繁盛ぶりは「ゆめのあと」と総称される一群の書物や『享元絵巻』^{きょうげんえまき}（江戸中期）に見ることができる。



複製：名古屋市博物館蔵

図 1-22 享元絵巻(部分)

『享元絵巻』は宗春時代の名古屋の賑わいを絵画で表現したもので、広小路以南の本町通を中心に描いたものである。そこには、若宮八幡、清寿院、七寺など寺院のほかに、櫓をあげた芝居小屋が数多く描かれている。芝居小屋は常設の立派な劇場もあったようで、京や大阪の歌舞伎役者が次々と訪れた。また、宗春の許可した、西小路・富士見小路・葛町などの遊郭には、享保の改革による風俗取り締まりによって各地で営業が成り立たなくなっていた遊女たちが集まったという。

宗春の時代は芝居や遊郭が人気を集めるとともに、さまざまな商売が盛んになった。いろいろな食べ物が売られるようになり、本町通とその周辺には、餅・だんご・木の芽田楽、うどん、どじょう汁などを出す店があった。

宗春の政治は、消費や経済の活性化をはかり、「芸どころ名古屋」を築くことになったが、宗春と幕府との対立は深まり、元文4年(1739)、宗春はついに隠居謹慎を命ぜられて失脚した。

宗春の失脚後、遊郭の廃止や芝居小屋の営業禁止などにより、名古屋城下は火の消えたような状況となったが、19世紀初頭には芝居興行が復活し、賑わいを取り戻していった。そして、この後、文化文政期(1804~1829)にかけて名古屋の町人文化は頂点に達した。

名古屋城下町は、北東は^{おおぞねむら}大曾根村、北西は^{びわじまむら}枇杷島村、南は^{ひおきむら}日置村・前津小林村・^{ふるわたり}古渡村に接していた。城下町からは、美濃街道、木曾街道、下街道、岡崎街道など周辺へつながる街道が伸び、城下町の南方5.5kmほどのところに位置する熱田の町とは本町通(熱田みち)で結ばれていた。

江戸時代初頭、名古屋台地上には名古屋城下町と熱田という2つの拠点があり、それぞれが異なった産業と経済圏、文化圏を形成していた。熱田の町は東海道の宿駅が置かれたこともあって発展し、時代を経るにつれ、名古屋城下町と一体となって都市機能を発揮するようになっていった。

城下町の発展にともなって、周辺の農村も消費都市を支えるための野菜栽培などが活発に行われるようになり、現金収入を得るといふ経済的な恩恵を被ることになった。『尾張名所図会』(天保15年(1844))に描かれた御器所村(現昭和区御器所町)の沢庵漬の様子や、熱田魚市場(現熱田区木之目町)、枇杷島青物市場(現西区東枇杷島町・清須市西枇杷島町)の活況からもそれをうかがい知ることができる。



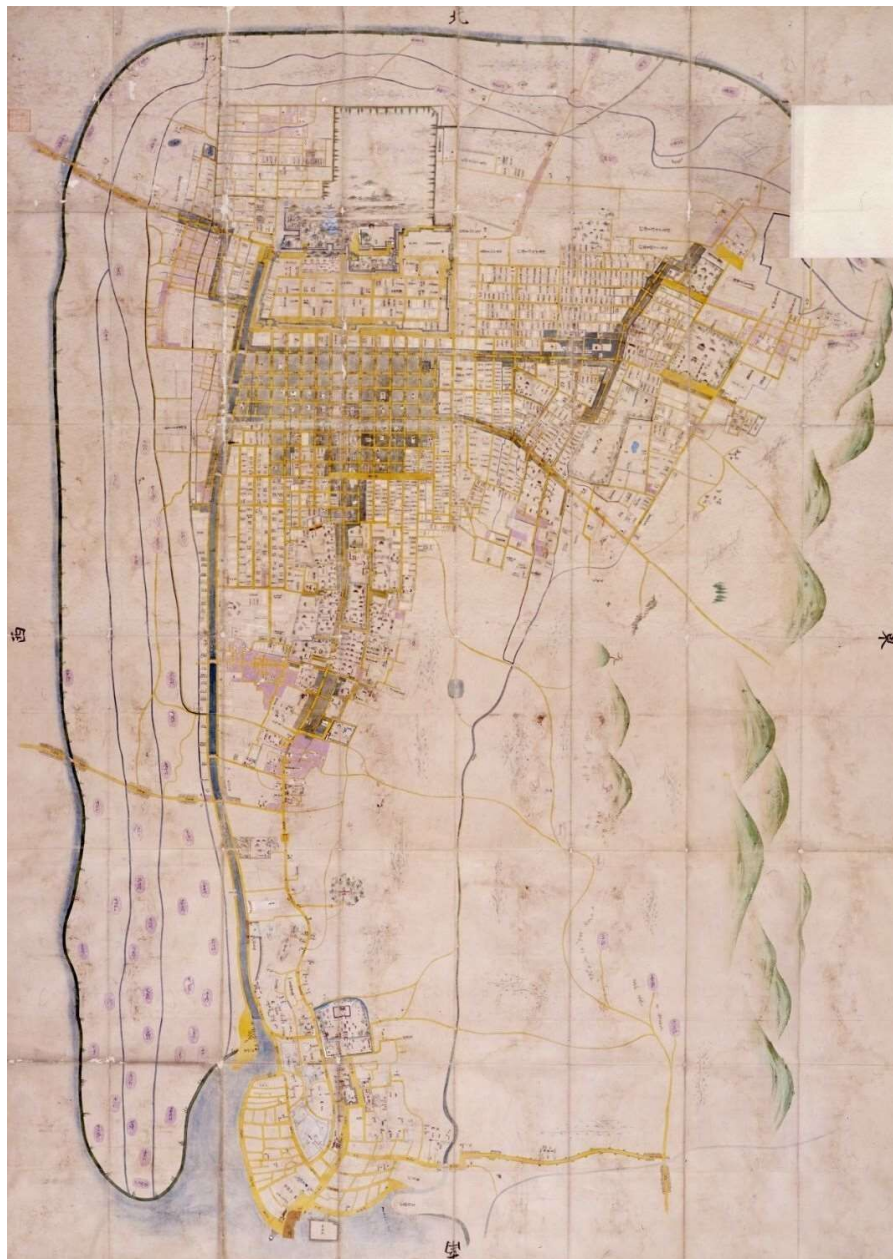
名古屋市蓬左文庫蔵

図 1-23 御器所の沢庵漬

(『尾張名所図会』(天保15年(1844))より)

更に、藩財政の基盤をなす米生産の向上のために農地の拡大が計られ、伊勢湾沿岸部の埋め立てによる新田開発が尾張藩主導のもと、富裕商人によって開始される。これによってあらたに誕生した村々では、町にはない、例えば「カグラ寄せ」など農村部独特の年中行事や祭りが行われた。

このように、名古屋城下町や熱田の縁辺にはそれぞれ異なる伝統・文化・生活様式を引き継ぐ村々が広がっていた。現在の名古屋は、このような地域特性を基盤に発展した町や村の集合体なのである。



名古屋市博物館蔵

図 1-24 名古屋城下とその周辺(『名古屋并熱田絵図』(江戸中期)より)

⑤近代

明治2年(1869)、尾張藩は藩籍を奉還し名古屋藩と改称し、明治4年(1871)には、廃藩置県によって名古屋県となった。名古屋城と城下町も大きな変化の時代を迎えることになる。

明治4年(1871)、名古屋城は、三之丸の門や武家屋敷から取り壊しが始まり、三之丸東北の御屋形に移住していた先の17代藩主徳川慶勝も退去を余儀なくされて、東京浅草瓦町へ居を移した。ここに、名古屋城における尾張徳川家の営みは消滅した。



写真 1-8 金鯱のない天守閣
(明治5年頃)

明治6年(1873)には、本丸、二之丸、三之丸のすべてが陸軍省の所管となり、名古屋鎮台(明治21年(1888)第三師団と改称)が置かれた。これにともない城内に軍の施設が建設され、二之丸御殿をはじめとする多くの建物が取り壊された。これより先に、天守閣の金鯱も引き下ろされている。金鯱は熱田港から船で東京へ運ばれたのち、ウィーン万博をはじめ各地の博覧会に出品されたが、地元の財界人(伊藤次郎左衛門・関戸守彦・岡谷惣助)の返還嘆願が叶い、明治11年(1878)、8年ぶりに天守に戻っている。

明治20年代、旧尾張徳川家下屋敷(大曾根邸、現東区徳川町)の整備が完了すると、18代当主徳川義禮よしあきらは名古屋移住を決意し、明治26年(1893)、尾張徳川家の伝統が名古屋の地で復活した。この後、大曾根邸の大部分は19代当主の徳川義親によって、昭和6年(1931)に名古屋市に寄贈された。この地に設置された徳川美術館(徳川黎明会)と名古屋市蓬左文庫には、現在も尾張徳川家に伝来した貴重な資料がほぼ完全な状態で収蔵されている。

名古屋城の本丸部分は、明治26年(1893)に陸軍省から宮内省に所管換えとなり、その後、本丸御殿は名古屋離宮として、皇族の宿泊にたびたび使用された。離宮は昭和5年(1930)に廃止され、本丸・西之丸・深井丸の土地と建物が名古屋市に下賜された。同年、大天守・小天守・本丸御殿・櫓4棟・門6棟が国宝に指定され、昭和6年(1931)からは、市民に公開されることとなった。

明治維新後、名古屋では紡績や陶磁器などを皮切りに産業発展が進み、明治10年代には、士族授産・殖産興業政策をうけて、織物・綿紡績・陶磁器・時計・マッチ・電灯などの分野で近代的な工業の創設が進められた。

明治 19 年 (1886) 5 月 1 日には東海道線の名古屋駅が開業した。これにとともに、広小路が笹島まで延伸・拡幅され、広小路が近代都市名古屋の主要幹線として発展していくこととなった。

明治 21 年 (1888) 4 月に公布された「市制町村制」により、明治 22 年 (1889) 10 月 1 日、名古屋市が誕生した。当時の市域は、東西約 4.93km、南北約 5.45km、面積約 13.34 km²であった。名古屋城を底辺として南にのびた逆三角形の形状をしており、かつての城下町と重なる部分が多かった。

明治 31 年 (1898) には、京都の伏見線に次いで国内 2 番目となる電気鉄道 (名古屋停車場～久屋町の愛知県庁前) が誕生した。また、明治 33 年 (1900) には中央線の名古屋～多治見間が開通し、千種駅が開業した。千種駅の開設は、市街地が東に向かって拡大するきっかけとなった。

明治 20～30 年代には、機械器具の発明・改良が一気に花開き、木製人力織機が発明されるとともに、自転車部品や鉄道車両などの製造が始まった。また、全国シェアの首位を占め続ける陶磁器産業では、次々と大規模な輸出向け洋式陶磁器メーカーが設立された。電力会社は合併により大規模化し、ガス事業においても新会社が設立された。

港湾の建設工事は明治 31 年 (1898) に始まった。港湾は当初、熱田港として建設されていたが、明治 40 年 (1907)、熱田町が名古屋市に編入されたのを受け、名古屋港に改められ、同年 11 月 10 日に開港した。なお、熱田町の合併は城下町起源の名古屋と港町熱田が行政的に一体となるという画期的な出来事であった。

名古屋台地の東側を流れる精進川^{しょうじんがわ}は、周辺の工場に物資を運ぶ水運として産業発展に貢献してきたが、高低差がないためにたびたび氾濫し、改修工事の必要性が高まっていた。明治 37 年 (1904)、東京砲兵工廠^{しょう}熱田兵器製造所が建設されることになり、その敷地造成のための土砂の確保を兼ねて、精進川の開削が行われることになった。これにより長年の懸案が解消されたのである。明治 44 年 (1911)、精進川は新堀川と改められた。



写真 1-9 名古屋港
(明治 40～大正 2 年)

さらに、この精進川開削の残土をもって、のちに鶴舞公園^{つるま}として整備される第 10 回関西府県連合共進会の会場が造成された。明治 43 年 (1910) に行われた第 10 回関西府県連合共進会は、産業振興を目的としたもので、参加府県数、会場の面積、建物の総面積、出品数のどれをとっても旧来の規模を大きく上回るものであり、当時の名古屋の産業を急速に発展させる一大原動力となった。

この他の治水事業としては、明治 6 年（1883）、舟運と農業用水の確保を目的として、庄内川から分岐して矢田川の地下を通過して堀川にそそぐ黒川が開削された。矢田川をくぐる施設として築かれた黒川樋門が、昭和 55 年（1980）に現地に復元されている（北区）。

本格的な上下水道の整備は、明治末から大正時代にかけて、上下水道の整備が行われた。

上水道は、犬山城櫓下の木曾川左岸より水を取り入れる計画が採用され、明治 43 年（1910）から創設工事に着手、大正 3 年（1914）に主要部分が完成し、同年 9 月 1 日から給水を開始した。創設当時、犬山で取水された水は東春日井郡鳥居松村（現春日井市）の沈澱池を経由し、愛知郡東山村（現千種区）の鍋屋上野浄水場において濾過^{ろか}され、ポンプ圧送により愛知郡東山村（現千種区）の配水池まで送られ、市内各所に配水された。現在、鍋屋上野浄水場（千種区）には創設当時から平成 4 年まで稼働していた旧第一ポンプ所が残されている。



写真 1-10 鍋屋上野浄水場旧第一ポンプ所
（市指定有形文化財）

下水道は、明治 41 年（1908）から布設工事が始まった。大正元年（1912）に初めて供用を開始し、大正 12 年（1923）には、旧市域に属する大部分の地域に下水道施設が完成した。布設区域は、当時の東区、西区、中区の 3 区全域と南区のうち堀川と新堀川とに囲まれた区域で、その面積は約 1,910ha、管路延長は約 342km であった。排水系統は、名古屋城と熱田神宮を結ぶ線を分水界として西部は堀川に、東部は新堀川に放流させるもので、混水式（合流式）により雨水、汚水ともに同一管で排水していた。

大正時代の産業は、大正 3 年（1914）に勃発した第一次世界大戦の拡大にともない輸出が急増した。この時期には重工業が勃興し、工業用の作業機や電気器械器具・工作機械が発展するとともに自動車や航空機生産も始まった。

大正 9 年（1920）に都市計画法が施行されると、土地利用計画、街路計画、運河計画、公園計画などが相次いで決定され、都市計画事業として行われていった。これと前後して、大正 10 年（1921）8 月には、名古屋市と周辺 16 町村との合併が実現した。これにより名古屋市は、市域の面積が東京市の約 2 倍となり全国 1 位（194.56 km²）、人口は東京・大阪につぐ全国 3 位（62 万 2781 人）の大都市となった。また、大正 9 年（1920）に内務省から名古屋へ赴任した石川^{ひであき}榮耀は、土地区画整理の指導育成に情熱を傾け、当時の大岩名古屋市長が「名古屋の名物は 2 つある、1 つは金のシャチ、もう 1 つは区画整理だ」と賞するほど

の成果をあげ、全国的に注目されるようになった。

大正 15 年（1926）には中川運河の工事が始まり、昭和 7 年（1932）に運河全体が完成している。中川運河開削の目的は、名古屋港と笹島貨物駅の間の貨物輸送を行うことであった。中川運河は松重閘門により堀川と結ばれ、多くの船舶がここを行き交った。

昭和 12 年（1937）、名古屋市が主催する名古屋汎太平洋平和博覧会が開催された。これは日本における最初の国際的博覧会であり、昭和 9 年（1934）に市人口が 100 万人を突破した名古屋市の大都市としての発展を示すものであった。昭和 12 年（1937）は、博覧会以外にも大都市名古屋の発展を印象付ける出来事の多かった年である。名古屋駅の駅舎が新築され、名古屋駅前から伸びる幅員 24 間（43.2m）の桜通が完成した。また、東山植物園・動物園が相次いで開園している。名古屋駅の新駅舎や東山植物園の大温室は「東洋一」とも称された。これらの施設を結ぶ市電も新路線が敷設され、名古屋市の交通網整備の上でも記念すべき年であった。



写真 1-11 松重閘門
（市指定有形文化財）



名古屋市博物館蔵

写真 1-12 汎太平洋平和博覧会会場

⑥戦後

明治・大正・昭和初期と目覚ましい発展を遂げてきた名古屋であったが、第二次世界大戦の空襲により、名古屋城天守などを含む、当時の市域の約 1/4 が焼失した。

昭和 20 年（1945）12 月、名古屋市は、「大中京再建構想」を発表し、大規模な戦災復興事業に取り掛かった。名古屋市の戦災復興計画は、東西南北 2 本の 100m 道路をはじめとする幹線道路の整備、市街地の墓地の東山地区への移転、小学校の隣接公園の設置など、全国的に見ても特徴のあるものであった。

この戦災復興事業により、道路、公園、駅前広場などが建設され名古屋市の都市基盤整備は大きく進んだ。また、復興の過程で、日本初の集約電波塔である名古屋テレビ塔¹の建設や、焼失した名古屋城天守の復元などが行われた。

郊外地では、膨らみ続ける都市人口の受け皿として、昭和 30 年代には、民間施行による区画整理事業が東山から鳴海にかけての東部丘陵などで行われ、大

¹ 令和 3 年（2021）、施設命名権（ネーミングライツ）の売却により、「中部電力 MIRAI TOWER」へ名称変更されているが、本計画においては文化財指定名称の「名古屋テレビ塔」にて記載する。

規模な住宅団地が建設された。

昭和 38 年（1963）には、守山市および愛知郡鳴海町を、昭和 39 年（1964）には知多郡大高町と有松町を編入合併し、現在の名古屋市域が確定した。市域の拡大と大規模な住宅地の開発、高度経済成長にともなって人口は増加し、昭和 44 年（1969）、名古屋市の人口は 200 万人を突破した。

1960 年代には、市南西部臨海地帯の埋立造成が行われ、港湾の整備が進んだ。これにより、鉄鋼・石油・ガス・セメントなど重工業分野の各社が新たな埋立造成地に進出し、60 年代後半には重化学コンビナートができて中京工業地帯の発展を支えた。

昭和 43 年（1968）に名古屋市が策定した「名古屋市将来計画」では、「国際的機能の向上」や「経済的機能の向上」とともに、「文化的機能の向上」や「豊かで住みよい都市づくり」が課題に掲げられた。名古屋はこの頃から、産業都市から中枢管理都市への転換が図られ、従来の工業中心の都市から、名古屋大都市圏の中枢機能、流通・サービス機能を担う第 3 次産業中心の都市へと転換していった。

平成元年（1989）、名古屋市は市制 100 周年を迎え、記念事業のメインイベントとして、世界デザイン博覧会を名古屋城・白鳥・名古屋港を会場に開催し、約 1,518 万人が来場した。この他、100 周年記念事業としては、堀川の総合整備、東山スカイタワーの建設（平成元年 7 月オープン）、名古屋港における水族館構想の推進（平成 4 年開館）、新修名古屋市史の編纂などが位置づけられた。

21 世紀を迎えると環境への意識が高まり、^{ふじまえ}藤前干潟（平成 14 年ラムサール条約湿地に登録）の保全や、自然の叡智をテーマにした愛・地球博（2005 年日本国際博覧会）の開催をきっかけに、市民の間にごみ減量や環境保全に関する取り組みが浸透していった。

平成 22 年（2010）、名古屋は徳川家康による名古屋築城から数えて 400 年を迎えた（名古屋開府 400 年）。平成 21 年（2009）からは、戦災で焼失した名古屋城本丸御殿の復元が始まり、平成 30 年（2018）に往時の姿を忠実に復元した優美な空間が完成した。



写真 1-13 名古屋城本丸御殿

2 名古屋市の歴史的資源

(1) 文化財の分布状況

① 指定・登録文化財

名古屋市には、国、愛知県、名古屋市の指定文化財が総計 381 件存在している。その内訳は国指定 145 件、県指定 109 件、市指定 127 件である。指定文化財のうち、有形文化財が 306 件で半数以上を占め、うち建造物は 54 件が指定されている。次に多いのは民俗文化財で 53 件である。記念物と無形文化財は件数が少なく、それぞれ 18 件と 3 件である。指定文化財の他に登録文化財が 114 件ある。(令和 5 年 10 月 31 日現在)

【指定区分別】(令和 5 年 10 月 31 日現在)

区 分	件 数
国指定の文化財	145 件 (うち建造物 13 件、記念物 8 件)
県指定の文化財	109 件 (うち建造物 12 件)
市指定の文化財	127 件 (うち建造物 29 件、記念物 10 件)
計	381 件

* 登録文化財 : 114 件 (令和 5 年 10 月 31 日現在)

【種別】

区 分	件 数
有形文化財	306 件 (うち建造物 54 件)
無形文化財	3 件
民俗文化財	53 件
記念物	18 件 (うち史跡 12 件)
伝統的建造物群	1 件
計	381 件

【指定文化財一覧表】（令和 5 年 10 月 31 日現在）

種別	有形文化財								無形文化財		民俗文化財		記念物			伝統的建造物群	合計
	建造物	絵画	彫刻	工芸品	書跡・典籍	古文書	考古資料	歴史資料	芸能	工芸技術	有形の民俗文化財	無形の民俗文化財	遺跡	名勝地	動物・植物・地質鉱物	重要伝統的建造物保存地区	
国指定	13	15	5	50	44	4	1	3	1	0	0	0	6	1	1	1	145
国登録	113	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	-	114
県指定	12	17	9	41	18	0	6	4	0	0	0	2	0	0	0	-	109
市指定	29	12	7	9	0	0	3	4	2	0	18	33	6	1	3	-	127
合計	167	44	21	100	62	4	10	11	3	0	18	35	12	3	4	1	495

【（参考）文化財の保存技術】 1 件

選定保存技術：能楽小鼓（のうがく こつづみ 胴・かわ 革）製作修理（せいさくしゅうり 保持者：鈴木 すずき 理之氏 まさゆき）

(ア) 国の指定文化財

名古屋市に残る国の指定文化財 145 件の内訳は、国宝・重要文化財 135 件（建造物 13 件、絵画 15 件、彫刻 5 件、工芸品 50 件、書跡・典籍 44 件、古文書 4 件、考古資料 1 件、歴史資料 3 件）、重要無形文化財(芸能) 1 件、特別史跡・史跡 6 件、名勝 1 件、天然記念物 1 件、重要伝統的建造物群保存地区 1 件である。

○国宝、重要文化財

建造物としては、名古屋城（西南隅櫓、東南隅櫓、西北隅櫓、表二の門）、名古屋城二之丸大手二之門、名古屋城旧二之丸東二之門、富部神社本殿、観音寺多宝塔、竜泉寺仁王門、興正寺五重塔、旧名古屋控訴院地方裁判所区裁判所庁舎、名古屋市東山植物園温室前館、名古屋市庁舎、愛知県庁舎、八勝館、名古屋テレビ塔があり、いずれも名古屋の歴史と文化を代表する建築物である。

絵画としては、狩野派により描かれた名古屋城旧本丸御殿障壁画、地藏院の絹本著色騎馬武者像(伝足利尊氏像)がその代表的なものである。



写真 1-14 名古屋城旧本丸御殿障壁画(部分)

彫刻としては、熱田神宮の木造舞楽面、七寺の木造観音菩薩坐像及勢至菩薩坐像、長母寺の木造無住和尚坐像などが指定されている。

工芸品としては、国宝の短刀銘来国俊を含む熱田神宮の刀剣類や古神宝類をはじめ、刀剣類が多く指定されているほか、古瀬戸黄釉魚波文瓶のような焼きものも指定されている。

書跡・典籍としては、国宝古事記賢瑜筆などの国宝 4 件を含む宝生院の書跡をはじめ、名古屋市蓬左文庫や熱田神宮などの書跡が指定されている。

考古資料としては、袈裟襷文銅鐸がある。



写真 1-15 木造勢至菩薩坐像

○重要無形文化財

芸能の部で尺八が指定されている(保持者:野村 正也氏(芸名:野村 峰山))。

○史跡・名勝・天然記念物

史跡としては、特別史跡名古屋城跡や東海地方最大級の前方後円墳である断夫山古墳をはじめ、大曲輪貝塚、志段味古墳群、八幡山古墳、大高城跡がある。名勝としては、名古屋城二之丸庭園、天然記念物としては名古屋城のカヤがある。

・二之丸庭園（名勝）

二之丸庭園は寛永 5 年（1628）頃までに初代藩主の徳川義直によって築かれた。初期の庭園は、聖堂や八角形の「金声玉振閣」^{きんせいぎよくしんかく}などが配され、儒教的性格の強いものであった。その後、文政年間（1818～1829）に大きく改変されたが、築山や大型の庭石などの配置は旧状をとどめているとされ、城郭内に現存する大名庭園として価値の高いものである。



写真 1-16 名古屋城二之丸庭園

○重要伝統的建造物群保存地区

重要伝統的建造物群保存地区としては、平成 28 年 7 月 25 日に選定された有松の東海道沿いの町並みがある。東海道沿いには、今なお豪壮な絞商の主屋をはじめとする数多くの伝統的な建物が残り、有松絞りにによって繁栄した往時の様子を今に伝えている。

○選定保存技術

^{のうがく こつづみ どう かわ せいさくしゅうり}
能楽小鼓（胴・革）製作修理（保持者：鈴木^{すずき} 理之氏^{まさゆき}）

選定保存技術として能楽小鼓（胴・革）製作修理がある。能楽小鼓の胴は桜材に漆を塗ったもので、革は馬皮を鉄輪に張ったものに補強と装飾のため、その一部に漆を塗っている。それぞれの胴に、ふさわしい革を組み合わせる作業も熟練が必要となる。氏は、胴を彫り出して漆で仕上げ革を製作して組み合わせるといって工程を一貫して行っている。

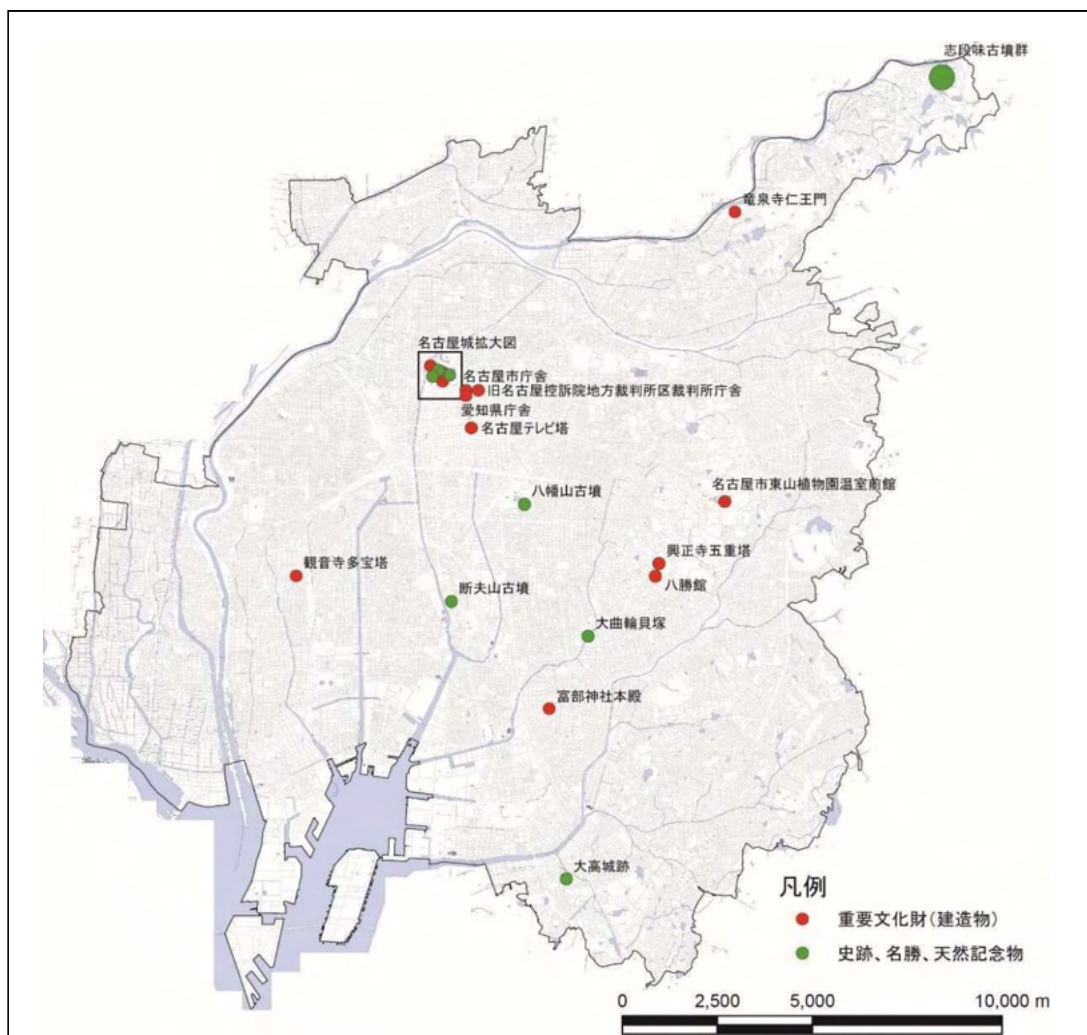


図 1-25 名古屋市内の重要文化財等(令和 5 年 10 月 31 日現在)

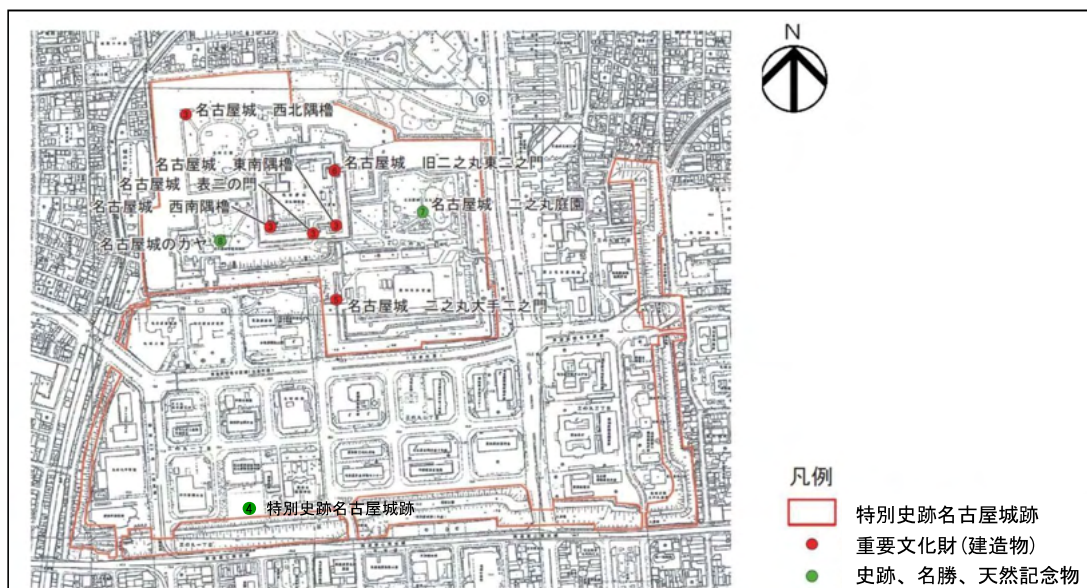


図 1-26 名古屋城内の重要文化財等(令和 5 年 10 月 31 日現在)

（イ）国の登録文化財

登録有形文化財（建造物）113 件、登録記念物（名勝地関係）1 件が登録されている。

登録有形文化財としては、旧加藤商会ビル、名古屋市公会堂などの近代建築をはじめ、寺院、料亭、醸造所など多様な建造物が登録されている。

登録記念物としては、明治 42 年（1909）開園の鶴舞公園が登録されている。

（ウ）愛知県の指定文化財

名古屋市に残る愛知県の指定文化財 109 件の内訳は、有形文化財 107 件（建造物 12 件、絵画 17 件、彫刻 9 件、工芸品 41 件、書跡・典籍 18 件、考古資料 6 件、歴史資料 4 件）、無形民俗文化財 2 件である。

○有形文化財（建造物、美術工芸品）

建造物としては、東照宮社殿、瑞泉寺総門、建中寺徳川家霊廟、無縫塔（長慶寺）、日泰寺奉安塔、草結庵、暮雨巷、旧藤山家住宅日本家、旧渡辺家書院及び茶室、伊藤家住宅、井桁屋（服部家住宅）、服部幸平家住宅・倉がある。

絵画としては、旧清須城障壁画や狩野常信作の織田信長公画像などがある。



写真 1-17 旧渡辺家書院及び茶室

彫刻としては、栄国寺の木造阿弥陀如来坐像や聖徳寺の木造聖徳太子立像、熱田神宮の神事面などがある。

工芸品としては、熱田神宮の刀剣類のほか、笠覆寺の梵鐘や灰釉魚波文四耳壺などがある。



写真 1-18 木造阿弥陀如来坐像（栄国寺）

書跡・典籍については、織田氏側近資料を多く含む尾張円福寺文書や足利義教連歌会記録である永享四年連歌懷紙などがある。

考古資料としては、慶応 3 年（1867）に熱田神宮に奉納された鉄地金銅張馬具（古墳時代）などがある。

歴史資料としては尾張国絵図や三河国絵図、尾張藩領産物帳などがある。



写真 1-19 鉄地金銅張馬具

（写真提供：熱田神宮）

○無形民俗文化財

無形の民俗文化財として、尾張や西三河地方に伝わる民間武術の一種である棒の手（桜の棒の手、守山の棒の手）がある。

（エ）名古屋市の指定文化財

名古屋市の指定文化財 127 件の内訳は、有形文化財 64 件（建造物 29 件、絵画 12 件、彫刻 7 件、工芸品 9 件、考古資料 3 件、歴史資料 4 件）、無形文化財 2 件（芸能 2 件）、有形民俗文化財 18 件、無形民俗文化財 33 件、史跡 6 件、名勝 1 件、天然記念物 3 件である。

○有形文化財（建造物、美術工芸品）

建造物としては、富部神社祭文殿及び廻廊、建中寺総門、丹羽家住宅、揚輝荘聴松閣などさまざまな時代、種類の建造物がある。

絵画としては、興正寺の梨木禽鳥図屏風、性高院の絹本著色松平忠吉像などがある。



写真 1-20 梨木禽鳥図屏風（興正寺）

彫刻としては、成願寺の木造十一面観世音菩薩立像、龍潭寺の木造如来仏頭、興正寺の木造観音菩薩立像などがある。

工芸品としては、願王寺の刺繍涅槃図、擬宝珠（旧裁断橋所用）などがある。

考古資料としては、桜田貝塚出土の魚形土器、大須二子山古墳出土品がある。

歴史資料としては、江戸時代の俳人である横井也有関係資料や日本で最初の理学博士となった伊藤圭介関係資料などがある。

○無形文化財

無形文化財としては、^{さいばらさくらびと}催馬楽桜人（雅楽、保持団体：催馬楽桜人保存会）と志野流香道（保持団体：志野流香道松隠会）がある。



写真 1-21 催馬楽桜人

○有形民俗文化財、

有形民俗文化財としては、馬の塔の馬標^{だし}・馬具などがある。

○無形民俗文化財

無形民俗文化財としては、市内各所に残る山車行事とからくりを乗せた山車^{だし}、棒の手や祭礼、祭囃子、木遣り音頭、筏師一本乗りなどがある。

○史跡

史跡としては、白鳥第1号墳、千鳥塚などがある。



写真 1-22 白鳥第1号墳

○名勝

名勝としては、旧「年魚市湯」展望地がある。

○天然記念物

天然記念物としては宝珠院^{ほうしゅいん}のイヌナシ、大乃伎神社^{おののぎ}の菩提樹、村上社のクスノキがある。

② 埋蔵文化財

名古屋市域は、東部の丘陵地、中央の洪積台地、洪積台地をとりまく沖積平野から成っており、古くからの集落は、洪積台地の辺縁を中心に営まれている。

瑞穂区、熱田区、南区、緑区などでは、縄文時代から弥生時代の遺跡が多く分布している。台地部から東部丘陵地には、古墳が多く残り、なかでも守山区の志段味地区や龍泉寺周辺にはさまざまな時期の古墳が集中している。東部丘陵地を含む千種区、昭和区、緑区、天白区、名東区などは、古代から中世にかけて須恵器や施釉陶器の一大産地であった猿投窯の一部を形成していた地域にあたり、古窯跡が非常に多く分布している。

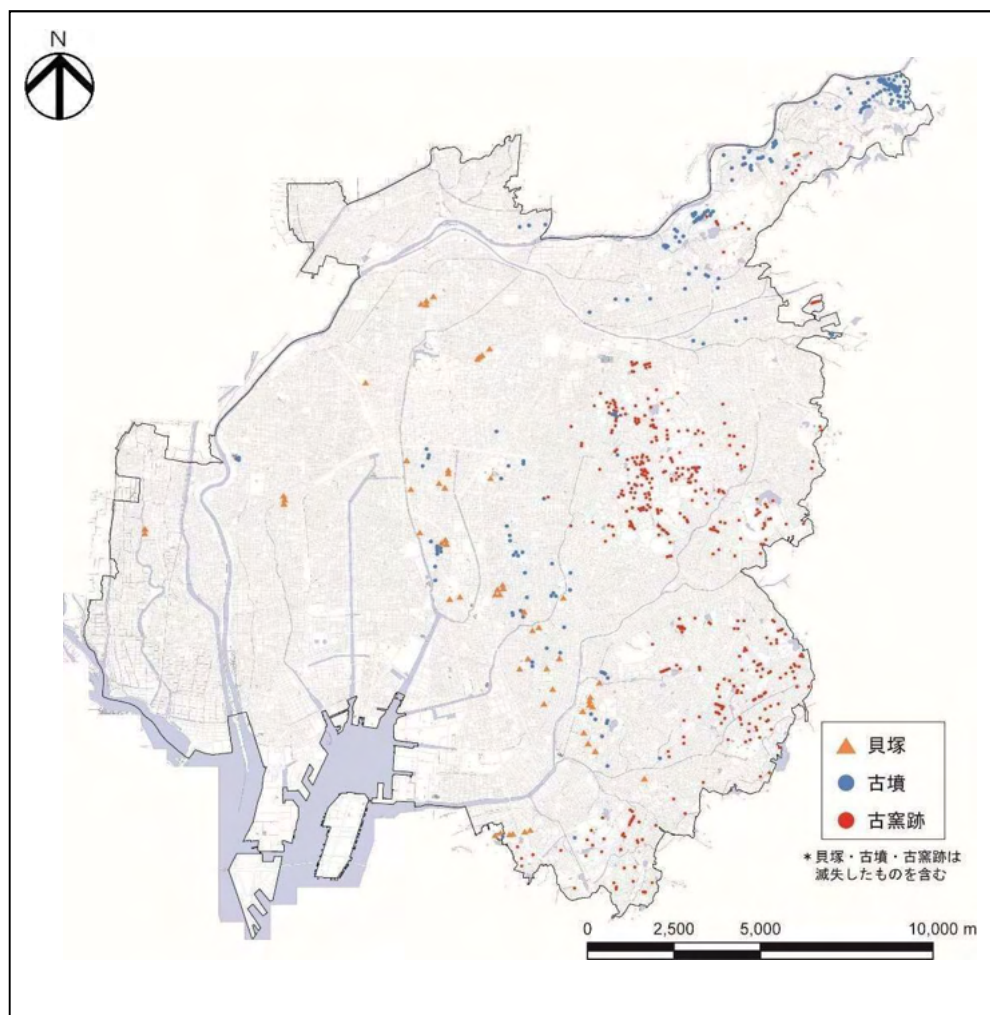


図 1-27 埋蔵文化財分布図

【コラム】徳川美術館の文化財

2代藩主光友が大曾根屋敷として造営し、明治時代、尾張徳川家の別邸として使用された地は、現在、徳川園として整備公開されている。

徳川園の一角に立地する徳川美術館は、昭和10年（1935）、徳川黎明会^{とくがわれいめいかい}によって開設されたもので、尾張徳川家に伝えられた数々の「大名道具」をそのまま収蔵し、展示・公開している他に例を見ない美術館である。

収蔵品は徳川家康の遺品を中心に藩祖義直以下歴代藩主とその家族の遺愛品1万数千件に及ぶ。その中には、武家のたしなみとして重んじられた茶の湯に関する収蔵品も多い。「紙本 著色源氏物語絵巻」をはじめ国宝9件、重要文化財59件を含み、徳川美術館ならではの豊富さ、質の高さ、そして保存状態のよさを誇っている。



写真 1-23 初音蒔絵黒棚飾り
(櫛箱・歯黒箱・小角赤手箱・渡金箱付き)

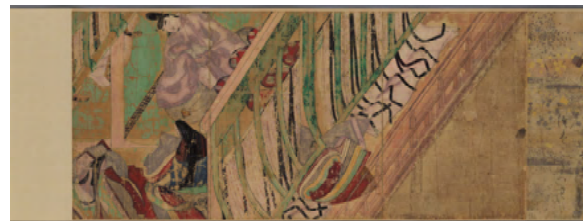


写真 1-24 源氏物語絵巻 柏木(三)絵

徳川美術館所蔵 ©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

徳川美術館所蔵 ©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPartcom

(2) 名古屋の歴史と伝統を反映した人々の営み

①祭り

名古屋では、疫病から逃れ、無病息災を祈る牛頭天王を祭神とする天王信仰が最も身近なものであった。なかでも、那古野神社（旧三之丸天王社、中区）、洲崎神社（旧天王崎天王社、中区）、南新宮社（熱田区）、富部神社（旧蛇毒神天王社、南区）などは、江戸時代から著名な神社であった。これらの神社では、提灯を飾った山車や巻藁船などを出す天王祭が行われてきた。この他、筒井町（東区）や八坂神社（西区）でも天王祭が盛んに行われている。また、市内で散見される屋根神にも津島社（天王社）が祀られており、天王信仰は市内の広範囲に展開している。名古屋の祭りの特徴である山車もこの天王祭の中で始まったものである。

名古屋の山車祭礼と山車に登載されたからくり人形は、日本全体からみても独自の発展を遂げただけでなく、広く普及した。『名古屋市文化財報告書X』（昭和56年（1981））によると市内には44両の山車があり、現在24両が市指定の無形民俗文化財となっている。現在の市域で山車が出た早い例は、熱田の南新宮社の祭りで、文明年間（1469～1487）にさかのぼるという。熱田では昭和時代まで、大山と車楽という2種類の古い様式の山車が出された。これらの山車は、名古屋城築城以前から行われていた祭りに特徴的なもので、同じく名古屋城よりも古い歴史を持つ（三之丸）天王社の祭りにも車楽が出された。一方、名古屋城下町で発展した山車は名古屋型と呼ばれるもので、名古屋の山車の特徴であるからくり人形を乗せることを前提とした山車である。

市内に現存する山車の多くは、名古屋型である。車楽は、那古野神社や富部神社にわずかに残るのみであり、大山は既に消滅してしまった。



名古屋博物館蔵
写真 1-25 名古屋型山車
(若宮八幡社の福祿寿車)



写真 1-26 車楽
(熱田・中瀬町の車楽(復元))



写真 1-27 大山
(熱田・田中町の大山(昭和10年(1935)))

市内に最も多く残る名古屋型の特徴は、以下のとおりである。

二層造りで唐破風の屋根を細い四本柱で支え、その四方は吹き抜けになっており、2層目の正面に一段下がった前棚を備え、中央を開けて高欄で囲む。四本柱内に主役のからくり人形、前棚には磨振人形などの前人形を載せる。木組みの周囲は大幕で囲い、高欄下には細長い水引幕をかける。車輪は一木四輪の外輪で、人を巻き込まないように、格子状の輪掛を取り付け、その上へ楫棒が地面と平行に車体本体の前後に伸びている。屋根は四本柱を土台に固定し、山車内部のセリ上げを使い、綱を操作することによって屋根の上げ下げを行う。この名古屋型は、東照宮祭、若宮祭に出される山車をはじめ、三之丸天王祭の見舞車などに採用された。現在、若宮八幡社に残る福祿寿車や東区の筒井町・出来町、中村区の広井神明社に残る山車などに見ることができる。

山車は城下町のほか、東海道などの街道に形成された町の祭礼でも曳かれた。熱田を除くと、緑区鳴海や同区有松などがその代表例である。

鳴海の山車は9両あり、鳴海八幡宮に属する5両は、からくり人形を乗せた相原町の山車が名古屋型である以外は、単層の囃子台であり、名古屋市内ではここだけに見られる山車形態である。成海神社に属する4両は、二層構造である点は名古屋型と変わらないが、車輪や前壇とよばれる台のある構造に知多型の古い山車様式を残している。

有松には3両の山車がある。西町では明治6年（1873）に名古屋型の山車を製作しており、中町と東町の山車は、他地域で曳かれていた名古屋型の山車を買求めたものである。

山車はかつて農村であった場所でも、各地域の天王祭や豊作のときに曳き出された。中川区戸田、同区牛立、西区比良、守山区大森、南区本星崎、同区戸部などである。瑞穂区井戸田には大山があったが、戦災で焼失した。山車の形態は、南区戸部が車楽である他は名古屋型である。

中川区戸田では、笠鉾の祭りであったものを寛政8年（1796）に山車祭りに変更した。一之割から五之割までの地区に5両の山車が残されている。これらは、様式的には名古屋型の山車であるが、農村らしい素朴な素木造りである。

中川区牛立と守山区大森では、地元の天王祭に山車を曳いた。牛立の山車は江戸時代末期に志水八王子社の祭車を譲り受けたものである。西区比良でも本来は地元の天王祭に山車が曳かれていたが、現在は隔年秋に曳き出されている。

名古屋型の山車の特徴であるからくり人形の製作技術は、享保18年（1733）に京都から名古屋に来た玉屋庄兵衛などの人形師により発達した。現在は、尾陽木偶師9代目玉屋庄兵衛が、江戸時代から続く技を伝えている。

農村部の祭礼では、町方の山車に対して、神楽屋形が出されることが多かった。『名古屋市文化財報告書X』（昭和56年（1981））によると市内には74基の神

楽屋形（古くは「獅子屋形」または「獅子神楽屋形」とも呼ばれた）がある。これらは伊勢大神楽の影響を受けたもので、神体の獅子頭を納める神楽屋形がさまざまに装飾され、それに太鼓をつけて、竹を細く削ったばちで叩く。

中川区下之一色には、南ノ切、東ノ切、西ノ切、中ノ切の4基の神楽屋形が残る。これらは、江戸時代後期のほぼ同時期に造られたものであり、類似性がある。2年に一度7月に行われる川祭り（浅間社祭）に曳き出され、祭りを華やかなものとしている。

港区には、小碓^{おす}四丁目、当知^{とうち}三丁目、新茶屋五丁目、知多二丁目に神楽屋形がある。小碓町の神楽屋形は、寛政年間に近在で製作されたものを明治初年に譲り受けたものである。また、港区当知町の神楽屋形は、名古屋城下の大久保見町の住人鋸屋佐助の作である。新茶屋五丁目の神楽屋形には、「文政庚寅十三歳（1830）」と銘記されており、神楽から派生した男獅子舞も保存会によって継承されている。知多二丁目の神楽屋形は、愛知県知多郡からの移住者が山神社に奉斎したものであり、山神社の祭礼に用いられる。



写真 1-28 名古屋まつりに参加する
神楽屋形

尾張から西三河にかけて広く分布した馬の塔は、市内では熱田神宮、大須観音、荒子観音、龍泉寺などへ盛んに奉納されていたが、馬を飼うことがなくなったため、衰亡していった。馬の塔の警固としてつくことが多かった棒の手は、各種の流派が継承され、今も各所で行われている。

岩塚七所社の「きねこさ祭」は、中世に起源をもつ田遊び・田楽の流れを伝える貴重なものである。市内での農耕は微々たるものになってしまったが、農業に由来する年中行事や五穀豊穡を願う祭礼は所々で行われている。

名古屋市内には、屋根の上や軒下に小さな^{ほくら}祠を設けた「屋根神」が多く見られる。屋根神には、津島社、秋葉社、熱田社の神々が祀られ、地域住民の持ち回りで管理されている。西区や中村区に多く分布している。

②伝統文化・芸能

江戸時代、尾張藩では、初代義直や7代宗春など歴代藩主の多くが、文化や学問の振興に取り組み、さまざまな文化活動が活発になった。特に茶華道や能など武家のたしなみとされる文化が花開くとともに、町民にも芝居などの文化が広まった。また、狂言、踊りなど幅広い分野の芸能が飛躍的に盛んになり、「芸どころ名古屋」の気風が培われた。

茶道：尾張藩の茶道は、有楽流うらくりゅうが主流であったが、12代藩主の齊莊なりたかは、裏千家せんのかげんさい11代の千玄々斎につき、市内には玄々斎好みの茶室も残る。一方、町人の間では、表千家と松尾流の茶道が盛んであった。名古屋では、江戸期から続く商家はもとより、明治以降の新興商人の大邸宅には、必ずといっていいほど茶室が設けられており、日常的に茶を喫する風習が伝統的に継続してきた。市内各所に残る茶室を利用した茶会が、現在も盛んに行われている。



写真 1-29 茶会の様子

(写真提供：熱田神宮)

香道：名古屋では志野流香道が継承され、無形文化財に指定されている。志野流は、室町時代、志野宗信が足利義政の知遇を受けて、大名、武家にふさわしい香道として創始した。志野流家元の蜂谷宗意が京都から名古屋に移り住み、現在、名古屋を中心に全国に教場を設けている。志野流には歴代の家元が考案した多くの「組香」が伝えられ、源氏香、三景香などをはじめ、およそ 250 組の組香が保存されている。

狂言：名古屋の狂言は、慶長 19 年（1614）、山脇五郎左衛門源助元宜が初代藩主の徳川義直に召し抱えられたことに始まる。この元宜が尾張藩お抱えの最初の能役者となった。元禄 9 年（1696）、4 代和泉元知の時に京都から名古屋へ移住した。明治時代、名古屋の狂言の伝統を守るため、狂言共同社が結成され今日に至る。

能（笛方）：能楽笛方藤田流の初代藤田清兵衛重政は、寛永 6 年（1629）、2 代將軍徳川秀忠の仲介により、初代藩主義直に仕えるため京都から名古屋に移住した。4 代藩主の徳川吉通に近侍した近松茂矩の『昔咄』によると、初代藩主義直は小鼓の名手、2 代藩主光友は舞の名手で、その家臣たちも能を習得していたという。

踊り：名古屋では現在も舞踊が盛んで、「在名五流」（赤堀流、工藤流、名古屋西川流はなやぎ、花柳流ふじま、藤間流）による舞踊会などが催されている。江戸後期、尾張藩では藤間流の舞踊を学ぶものが多かったが、天保 12 年（1841）、名古屋に移住した初世西川鯉三郎は、名古屋西川流を創設し独自の世界を築いた。戦後、2 世西川鯉三郎は演劇性を取り入れた「名古屋をどり」を始め、西川流は日本舞踊の大流派と成長して現在に至る。

③伝統産業

名古屋城下町とその周辺では、木曾や飛騨地方の良質な木材、尾張・知多・三河産の綿、古代からの主要産業であった焼き物の伝統などを背景に、高い技術を有する多くの産業が育った。現在、市内に残る伝統産業以外にも旧尾張藩領であった地域には、瀬戸焼・常滑焼・美濃和紙などの伝統産業が残されている。伝統産業は、地域の歴史と風土に根ざしたきめ細やかな「モノづくりの心」を伝え、人々の生活に豊かさと潤いをもたらしている。

尾張七宝：天保年間に、尾張国海東郡の梶常吉がオランダ七宝から銅胎植線施釉を学び、その技法を完成させたのがその始まりとされる。七宝とは、仏典にいう七つの珍宝、金・銀・瑠璃・しゃこ・めのう・真珠・まいえ、のことで、それらをちりばめたような美しい輝きを放つ。



写真 1-30 尾張七宝

尾張仏具：木製漆塗り製品を中心とし、江戸期より名古屋城下において下級武士の内職として興る。明治期以降は問屋を中核とし、多種多様な仏具に対し分業制により良質な商品を大量に生産し、完成品を日本全国に流通させている。仏具以外にも神具、祭礼具などの製造も行っている。



写真 1-31 尾張仏具

有松・鳴海絞：名古屋の絞り染めは、今から約 400 年前の名古屋城築城の際に、九州豊後の人々によって伝えられたといわれている。その後、尾張藩の手厚い保護のもとで急速に発展し、東海道を行きかう旅人に珍重された。



写真 1-32 有松・鳴海絞

名古屋仏壇：当地域を代表する工芸品である仏壇の基礎ができあがったのは、江戸時代中期の宗門改め、壇家制度の確立にさかのぼる。名古屋における仏壇製造の歴史は、元禄 8 年（1695）、に仏壇専門店「ひろや」が創業したのが始まりといわれている。現在、橘町界限の本町通り沿いは、仏壇店が軒を連ねる仏壇街となっている。

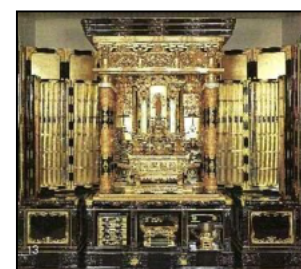


写真 1-33 名古屋仏壇

中部人形節句品（名古屋節句飾）：名古屋における節句人形の歴史は、寛永年間（1624～1644）に始まり、天明年間（1781～1789）頃の「名府年中行事」によると、玉屋町と諸町にひな人形市が立っていたことが記されている。明治に入ると東京から職人が招かれ、技術が一段と向上して、全国有数の産地へと成長を遂げた。



写真 1-34 中部人形節句品

名古屋友禅（手描友禅）：名古屋における手描友禅は、享保年間（1716～1736）、7代藩主徳川宗春の遊芸華やかな時代に、京都から絵師・友禅師などが往来して伝えられた。その後、当地に質素儉約の気風が定着し、花鳥風月を基本にした、色使いも単彩濃淡調の渋い友禅染となり、今日に受け継がれている。



写真 1-35 名古屋友禅(手描)

名古屋友禅（型友禅）：型友禅は、友禅模様を型彫りした型紙を下絵の代わりに用い、使う色ごとに型紙を用意して絵柄を付けていく友禅染である。名古屋における型友禅は、その起こりは紺屋での旗や幟などにあると言われ、江戸時代末期には、型友禅の産地基盤を確立した。明治に入ると、京都から新しい技術を導入するなどして、生産が拡大した。



写真 1-36 名古屋友禅(型)

木桶：名古屋では江戸時代、富嶽三十六景「尾州不二見原」に描かれている様に、尾張藩所領の木曾^{さわら}榎を用いて桶の製造が盛んになった。旧桶屋町には、藩御用達の桶職人が多く住んでいたといわれている。



写真 1-37 木桶

名古屋桐箆笥：名古屋の桐箆笥は、約400年前の名古屋城築城のため、全国各地から集まった大工職人が定着し、箆笥製造にたずさわようになったのが始まりといわれている。当地が、木曾材など木材の集散地であったこともあり、袋町・大須界限の発展とともに産地が形成された。



写真 1-38 名古屋桐箆笥

名古屋黒紋付染：紋章は、平安時代に発生し牛車や衣服に付けられ、のちに武家の目印となった。現在は、紋章を付けた衣服は、礼装用となっている。名古屋の黒紋付染は、白生地を紋章の部分を残して黒で染め上げ、白く残した部分に紋章を描く。黒染めの工程で、紋型紙・紋当金網を用いる名古屋黒紋付染は、黒の美しさ、丈夫さで優れている。



写真 1-39 名古屋黒紋付染

名古屋扇子：名古屋の扇子は、18 世紀の中頃に京都から現在の西区幅下あたりに移り住んだ父子によって始められたのがその起こりとされている。名古屋は京都と並ぶ産地として知られ、京扇子が婦人物を主としているのに対し、名古屋扇子は、白扇など男ものを主体として発展してきた。



写真 1-40 名古屋扇子

和蠟燭^{わろうそく}：名古屋の和蠟燭は、17 世紀後半に会津地方から伝わったとされている。和蠟燭^{はぜ}は、^{いぐさ}櫛の実を搾った木蠟と藺草の芯、和紙を原料としており、植物性のため、洋蠟燭と比べ油煙が極めて少ない、風がふいても炎が消えにくいなどの特徴がある。また、灯芯のまわりに何回も塗り重ね太くしていくため、蠟燭の断面は、ちょうど木の年輪のようにになっている。

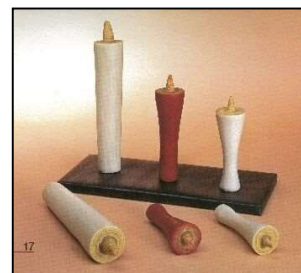


写真 1-41 和蠟燭

名古屋提灯：提灯の歴史は古く、遠く室町時代にさかのぼるといわれ、江戸時代には盆供養に提灯を使う風習が生まれ、盛んにつくられるようになった。名古屋提灯は、明治初期には貴重な輸出品としてもてはやされ、全国一の生産を誇った時期もあったといわれる。現在は、盆提灯、観光土産用（地張提灯）、お祭・神社仏閣・看板提灯などが多く生産されている。

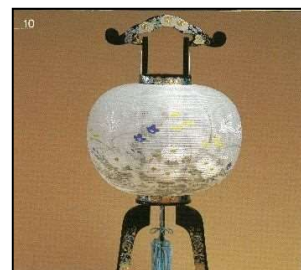


写真 1-42 名古屋提灯

また、名古屋は菓子どころとしても知られるほか、北区、守山区、緑区に江戸時代から明治時代にかけて創業した 5 軒の酒蔵があり、現在も酒造りを行っている。江戸時代以降、名古屋近郊で酒造りが盛んになると、多くが江戸に出荷され人気を集めたという。現在、市内の酒蔵には歴史的建造物が多く、伝統の酒造りとともに地域の歴史的景観を創出している。

④生活文化

(ア) 名古屋ことば

名古屋の「ことば」は他の地域の「ことば」と比べると、やわらかく、温かみがあり、相手に対して丁寧かつ上品でおおらかに聞こえる。また、江戸時代からの共通語や京言葉が今も多く使われていることが特徴である。

名古屋ことばは、上町言葉（上の言葉）、下の言葉と武家言葉から構成されている。このうち「上」とは、広小路通より北の碁盤割の町であり、「下」は広小路通の南側である大須、橘あたりを指す町といわれている。また、熱田には熱田弁（宮弁）なる独特の言葉もある。

名古屋ことばの特徴

- ①「さま(ちゃま)」がつく…おじさま、ねえさま、おっさま(和尚様)
- ②古語が生きている…お(措)いてちょうだやあ、米をか(浸・漸)してちょうだやあ
- ③京言葉が入っている…ようけ(余慶)、ぎょうさん(仰山)
- ④あそばせ言葉…ごまやあすばせ、いらやあすばせ
- ⑤武家言葉…ご無礼します、〇〇でござりまする

(イ) 食文化

7代藩主宗春の時代の資料からは、当時の名古屋の食べ物が豊かであった様子がうかがえる。京・大阪や江戸から入ってきた食べ物も多かったが、名古屋人好みの味付けが加えられて、この地の味となった。

代表的な名古屋の味としては、赤い豆味噌と溜り（醤油）がある。赤味噌仕立ての味噌汁は、名古屋ことばで「御御御付（おみおつけ）」などと呼ばれるが、これは室町時代の宮中の女房詞（にようぼうことば）からきた語である。現在、よく知られている味噌煮込みうどん、味噌おでん、味噌煮、土手鍋などは、甘い砂糖の入った練り味噌を使うもので、砂糖が日常化して以後の新しい食べ物と考えられている。



写真 1-43 きしめん

きしめんは、名古屋特有の食べ物であるが、いつ頃からあったかはよくわからない。喜多川守貞の『近世風俗志』には、「今世、江戸にて平打の温飰を、ひもかはと号く…江戸にてひもかはと云う平打うどんを、尾の名古屋にてはきしめんと云うなり」とあって、江戸時代後半にはあったことがわかる。

尾張名古屋では、茶の湯とともに茶菓子も発展した。名古屋築城と同時期に名古屋に店を開いたのは、初代藩主義直の尾張入府にともなう駿河越え商人の「桔梗屋」と大阪道修町からきた「両口屋」であった。「両口屋」は藩との結びつきも深く2代藩主光友から屋号を授かったという。江戸時代、藩御用達の御用菓子司は、藩の入手した砂糖を譲り受けて菓子を作っていたという。「桔梗屋」は明治末年にのれんを下ろしたが、この蒸し菓子法の流れを汲む「美濃忠」、「不老園」、「松川屋本店」などが、今も名古屋の茶菓子文化の一端を担っている。

なお、名古屋市蓬左文庫には、『御蒸菓子御見本』、『御干菓子御見本』のように江戸時代の菓子を描いた見本帳が残されており、当時の菓子の様子を知ることができる。

名古屋の人々にとってなじみの深い菓子のひとつに「オコシモノ」（オコシモン、オシモン等）がある。オコシモノは、米の粉を熱湯で練り、鯛などの型を彫込んだ木型に押し込んでからはずし、蒸して作る。食紅や色粉で着色される。オコシモノは桃の節句に合わせて作られる。餅のように焼いて醤油などを付けて食べる。市販もされているが、家々に保管された木型を使い、家庭で作ることも少なくない。



写真 1-44 オコシモノ

名古屋は、木曽の山々とそこから流れ出た木曽川などの河川、その河川が育んだ濃尾平野と豊かな海の恵みをもたらす伊勢湾に囲まれた大都市である。

そこに生きる人々の歴史は、台地の縁辺部に形成された集落に始まり、古墳や古窯、神社、城跡などに痕跡を残しながら積み重ねられてきた。

近世に入ると、天下を治めた徳川家康によって名古屋城が築かれ、名古屋城下町は、尾張藩における政治・経済・文化の中心地として繁栄した。ここによりやく現在の大都市名古屋の原型が姿を現した。

明治時代には、名古屋港の築港を契機に、古代よりこの地の拠点であった熱田が名古屋市と合併し、さらには、大正・昭和にかけて周辺地域が次々と名古屋市に編入され、旧城下町の外側で独自の文化を育んできた町や村が名古屋市の一部として一体的な歴史を歩み始めた。

大都市へと成長を遂げた名古屋市であったが、第二次世界大戦では空襲により甚大な戦禍を被り、名古屋の歴史を受け継ぐ多くの人々の命と生活、名古屋城をはじめとする貴重な歴史的建造物が失われてしまった。

戦後、名古屋市は大胆な戦災復興計画を実行して、戦災からの復興と戦前を上回る発展を成し遂げ、日本を代表する大都市として現在に至っている。

(3) 日本遺産

「日本遺産」は地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するものである。ストーリーを語る上で欠かせない魅力溢れる有形や無形のさまざまな文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としている。

令和元年（2019）5月20日に、有松の文化・伝統を語るストーリー「江戸時代の情緒に触れる絞りの産地～藍染が風にゆれる町 有松～」が、名古屋市として初めて日本遺産に認定された。愛知県内で地域型として認定されたのも初めての事例となる。

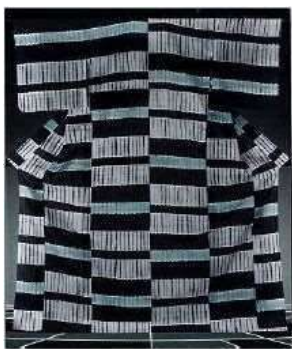
ストーリーの概要

どこまでも広がる藍色の空の下、藍で染められた絞り暖簾が風にゆれる古い商家の落ち着いた佇まい。絞りの町「有松」には、江戸時代の浮世絵さながらの景観が今も静かに広がっています。

「ほしいもの 有松染めよ 人の身の あぶら絞りし 金にかえても」

この歌を詠んだ『東海道中膝栗毛』の主人公の弥次さんは、絞りの素晴らしさに魅せられて手拭いを買いました。旅のお土産として、世界に知られている有松の絞りはいかがですか。

四百年の歴史を持つ有松の江戸文化は、今も多くの人々を魅了しています。



絞り浴衣本藍染鍔段



名古屋市有松伝統的建造物群保存地区



岡家住宅